

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

偉大な先人を追う苦しみの中、次代を担う真の力を身に付ける  
長崎県立佐世保北高校◎舟越 裕

## 4 特集

## 「主体性」の育成②

## 地域に生きる人材を育てる

- 6 **現状整理** 地域に対する若者の意識、課題を抱える地域の姿
- 8 **3人の生き方から考える** 地域に生きることの価値、地域に生きる人に必要な力  
 ・海外に出たことで見えてきた鹿児島と日本の魅力、自分の生き方  
 イギリス ケンブリッジ大 在学 岡本高也  
 ・地域での日常の中に見過ごされていた価値を見だし、育てていく  
 新潟県村上市 味匠「菘川」専務取締役 吉川真嗣  
 ・対話を通して新たな価値を創る「グローバルマインド」こそ、これからの地域に必要な  
 福岡県福津市 NPO法人地域交流センター津屋崎ランチ代表 山口 寛
- 16 **学校現場から考える** 生徒との真摯な対話が、地域を創る新しい価値観を育てる  
 北海道旭川東高校◎松井恵一 / 高知県立高知追手前高校◎杉山太夏子

## 20 指導変革の軌跡

## 20 京都府立嵯峨野高校

課題研究◎自ら課題を見付けて研究を深める「ラボ」で、社会で生きる学力を育む

## 24 静岡県・私立加藤学園暁秀高校・中学校

進学実績向上◎個に応じた指導と基礎・基本の定着を徹底し、学校全体の底上げを図る

## 28 30代教師の「転んでも起きる!」

生徒に与えるのではなく、生徒に考えさせる授業を追究  
山口県立下関南高校◎品川裕紀枝

## 30 生きたデータの徹底活用

保護者を「受験生の保護者」にする2年生冬休みからの働き掛け

## 34 未来をつくる大学の研究室

「不平等」の要因を解明し、皆が平等に暮らせる社会を目指す  
東北大学院 文学研究科 行動科学研究室

## 38 新課程のファースト・ステップ

新課程がもたらす学力差の広がり、どう対応すべきか  
岩手県立盛岡北高校

## 42 大学選択 新たな視点

大学での学びへの意欲とスキルを育成する初年次教育〈西日本編〉

## 48 VIEW'S SQUARE

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた  
あの時代、あの出会い

# 偉大な先人を追う苦しみの中、 次代を担う真の力を身に付ける

長崎県立佐世保北高校 舟越裕

多くの教師は若き時代、先輩を真似し、追い掛けることで指導のノウハウとその本質を身に染み込ませていく。だが先輩の存在が偉大であるほど、追い掛ける苦しみもまた大きくなる。今なお続く全力疾走の日々を、舟越裕先生が語る。

## 偉大なる達人との出会い



初任の長崎東  
高校での2年  
目、辰田幸敏先  
生が長崎北陽

台高校から転任してこられました。「日本史の辰田」は、県内では知らぬ者がいない存在でしたから、そんな方と一緒に働けることを楽しみにしながらも、「今年度、自分は日本史を担当させてもらえないかも」と先行きに不安を抱いていました。辰田先生の授業は、何度も見学させていただきました。計算された展開に引き込まれ、「何年経ったらこんな授業が出来るようになるのか」と思ったものです。また、先生は、板書内容

などが詳細に記されたノートを見せてくださいました。生徒の間で「辰田ノート」と呼ばれていたものです。授業、ノートを見せていただいた私は、早速先生の授業を真似してみました。しかし、いくら辰田ノートがあるからといって、授業がすぐにもまくるわけはありません。しかも、1年が経った頃からは、辰田先生から「舟越らしい指導をしているか?」「オリジナル教材は作っているか?」と声を掛けられるようになり、新たな課題を示されました。

先生と長崎東高校で一緒に2年間は、正直、その指導の外枠をなぞるだけで精いっぱいでした。自分の頭で理解できるようにになったのは、五島列島の小規模校に異動してからだと思います。若い教師が多かったその高校で試行錯誤の中で、少しずつ指導に自分らしさを盛り込み始めたのです。長崎東高校を離れて3年後には、センター試験模試などで県内の進学校を上回る成績を上げられるようになったこともあり、教科指導の土壌を辰田先生に耕していただいていたことに気がきました。

## 遠くても追いつきたい

辰田先生と再会したのは、現在の勤務校である佐世保北高校です。中高一貫校として新たなスタートを切ったばかりの本校で、辰田先生は教頭を務めていらっしゃいました。佐世保北高校での辰田先生との一番の思い出は、赴任2年目に進路指導部の一員として参加した、進路指導シラバスづくりです。高校3年間の進路指導を体系付けるため、何を、何のために、どのように、どこまで指導するのか、時系列で詳細に記述したもので、A4判で160ページ超の大作です。辰田先生に企画の大作と資料を示していただいた上で、それらを基に進路指導部の先輩と原稿を書き、先生のチェックを受けました。特に多くの指摘をいただいたのが、行事後の指導の手薄さです。行事はやりっぱなしではいけないことは分かっているつもりでしたが、シラバスで言語化すると、行事と行事をつなぐ指導が出来ていないこと

## 先輩教師の言葉

手法は変えても  
教育目標のレベルは  
変えてはいけない

長崎県・私立 佐世保実業高校校長  
辰田幸敏



若手とベテランの力量差をそのままにしておけば、

若い先生は生徒からの信頼を失います。次の世代を育てることはベテランの仕事ですから、私は自分の作った教材などを、全て同僚、後輩に渡していました。ただ、若手も1年経てば少しは余裕が出てきます。その余裕を余裕のままに終わらせずに、自分らしさをそこに盛り込むことを求めるのも、ベテランの仕事です。長崎東高校で、教師になったばかりの舟越先生に対して厳しく接したのは、私の当然の責任でした。佐世保北高校に舟越先生を迎えることを切望したのは私です。実は舟越先生は、長崎東高校で1年間毎朝正門に立

左 たつた・ゆきとし 地歴科。長崎北陽台高校、長崎東高校などを経て、諫早農業高校、佐世保北高校で教頭を務める。その後、島原高校などで校長を務め、12年度より佐世保実業高校校長。

撮影◎佐世保北高校にて

右 ふなこし・ひろし 地歴科。長崎東高校、奈留高校を経て、現在は佐世保北高校に勤務。2008年度より進路指導主事。



が分かりました。制作期間は6か月に及び、校務との両立は楽ではありませんでしたが、3年間の指導の流れを俯瞰し、自分を見直す機会になりました。

完成したシラバスは、本校の教師にとって指導の拠り所となりました。しかし、あれから6年が経ち、中高一貫校として数期の卒業生を送り出した今、シラバスの改訂に取り組むべき時期に来ています。当然その仕事は、進路指導主事となった私が中心となって行うべきものですが、隠さずに言えば、自分の力不足のため、その仕事の大きさに戸惑っている状況です。中高6年間の指導を体系立て、詳細なシラバスとして可視化するための手順は？ そもそも、一層多忙化する先生方が、何ページもあるシラバスに目を通してく

れるのか？ 私が考えるべきことはたくさんあります。実は今年、進路指導部で中高の指導の流れを6ページにまとめました。シラバスに比べたらわずかなボリュームですが、これだけの作業でも、自分の中に確たる構想を打ち立てた上で仲間の先生に協力をお願いしなければいけないことを痛感しました。辰田先生のようにはまだ自

分は考え切れていないのです。分厚いシラバスの背表紙を見る度に、自分にいら立ち、胸が苦しくなります。力量があればここまで出来るといふ世界を見ただけには、辰田先生に少しでも近付きたいと思います。私は生徒に「やってやれないことはない」といつも言っていますが、それは今の自分自身にも言えます。私は諦めません。

ち、大きな声で挨拶をして、登校する生徒を迎えました。これほどの熱意を持った人を鍛えれば、きっと次代を担う教師になると思ったのです。だからこそ、シラバス作成も舟越先生にお願いしました。当時の佐世保北高校は、さまざまな進路行事の意味を十分に理解しないまま消化している状態で、教師は多忙感と疲労感を感じていました。誰もが指導の意味と要点を理解でき、充実感を味わえるようになる……そんなシラバスを作りたかったのです。舟越先生は私の思いを理解し、共に形にしてくれる人でした。舟越先生がシラバスの改訂を考えていること、そして既に小さな挑戦をしていることは知っています。確かに、まだ40代前半の舟越先生が、あのシラバスと同じようなものを作ることは難しいでしょう。教師を取り巻く状況も変わっています。しかしそれでも、教師が目指すレベルを自ら下げ、手軽な目標で満足することは許されません。制作体制を見直し、期間を長く設定するなど、方法は変えながらも目指すレベルは決して変えてはいけません。舟越先生なら出来るかと信じています。

「主体性」の育成②

# 地域に生きる 人材を育てる

グローバル化する社会で求められる「主体性」とはどのようなものか。

今号では、グローバル化社会の中での「ローカル」、すなわち「地域」に焦点を当てる。

人口減、高齢化、空洞化などから衰退への不安を抱える地域において、

主体的に生きるために必要な力とはどのようなものか。その力を育むための指導と共に考えたい。

グローバル化の中で  
地域における人材育成を  
教師はどう考えているか？

「世界に羽ばたく人材も必要だが、同時に地元にも貢献する人材も重要である。しかし、どちらにも視野の広さと柔軟な感受性が不可欠である。そのために高校教育にも更なる変化が必要だろう」(宮崎県)

「英語を学ぶことで日本語を見直すことが出来るように、世界について広く知ることを通して、自分の国や住んでいる地域を再認識することが大切である。そうして、より広い選択肢から自分の進路を選んでいけるような指導をしていきたい」(岐阜県)

「これからは、世界の中の日本という視点で物事を見ていかなければならない。授業などを通して、そうした視点の広がりが必要であることを生徒に伝えていきたい」(兵庫県)

出典：『VIEW21』高校版読者モニター1へのアンケート結果より。アンケートは2012年8月にWeb及び用紙の郵送により実施。回答はWebもしくはファクスで回収。有効回答数は71。

8月号で見てきた、社会の環境変化に立ち向かうために必要なこと  
**「主体性」の育成**

本号のテーマ

グローバル化社会で、主体的に「地域に生きる」ために  
 必要な力と、その力を育む指導とは？

1. 「地域に生きる」ために必要な力とは？ ▶ 3人の生き方から考える P.8～15

「世界から地域を見つめ、地域の本当の価値を再確認する経験が大切」

イギリス ケンブリッジ大 在学 岡本尚也



「見過ごされていたものから、価値を見いだす力が求められる」

味匠「崑っ川」専務取締役 吉川真嗣

「新たな価値を創る『グローバルマインド』こそ、地域には必要」

NPO法人地域交流センター津屋崎ランチ代表 山口 寛



2. 「地域に生きる」人材を育むための指導とは？ ▶ 学校現場から考える P.16～19

「頑張った思い出をつくらせ、学び続ける力、知識を組み合わせる力を養う」

北海道旭川東高校 松井恵一



「教師自身が視野を広げ、生徒の見いだした価値と真摯に向き合い、対話する」

高知県立高知道手前高校 杉山太夏子

新しい価値観で地域を捉え、主体的に地域を創る生徒が育つ

2月号に向けて

- ◎ グローバル化社会において、主体的に「地域に生きる」人材に必要な力、その力を育む指導は、地域を越えてより広い世界に生きる人材に必要な力、指導と重なる部分もあるのではないかな？
- ◎ グローバル化する社会環境を積極的に利用することで、指導をより豊かなものに出来るのではないかな？

社会環境変化の中での「主体性」の育成を、4号連続で取り上げます

8月号

環境変化に立ち向かう  
 「主体性」を育む

10月号

「主体性」の育成①  
 (デジタル化)

12月号

本号

2月号

「主体性」の育成③  
 (グローバル化)

# 現状整理

図1は、20〜30代の若者に地方での暮らしへの意向を聞いたものだ。回答者の7割超が3大都市圏に生活しているが、そうした都市生活者も含めて約半数の若者が「地方で暮らしたい」と考えている。

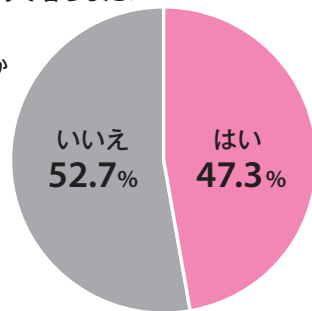
図2は、高校生とその保護者に将来の生活についての希望を聞いたものだ。「地元で仕事や生活をした（してほしい）」、「日本国内で仕事や生活をした（してほしい）」と考える割合は、高校生・保護者共に半数近くに上る一方、「世界をフィールドに活躍したい（活躍してほしい）」と考える割合が少ない。「人なみの安定した暮らし」「身近な人の幸せを大切にしたい暮らし」を望む割合が高いことから、外に出て、リスクを伴う挑戦をするよりは、身近

# 地域に対する若者の意識、課題を抱える地域の姿

「地域」は今、どのような状況にあるのだろうか。若者の地域への志向と、地域が抱える課題をデータを基に整理する。

図1 約半数の若者は地方で暮らしたい

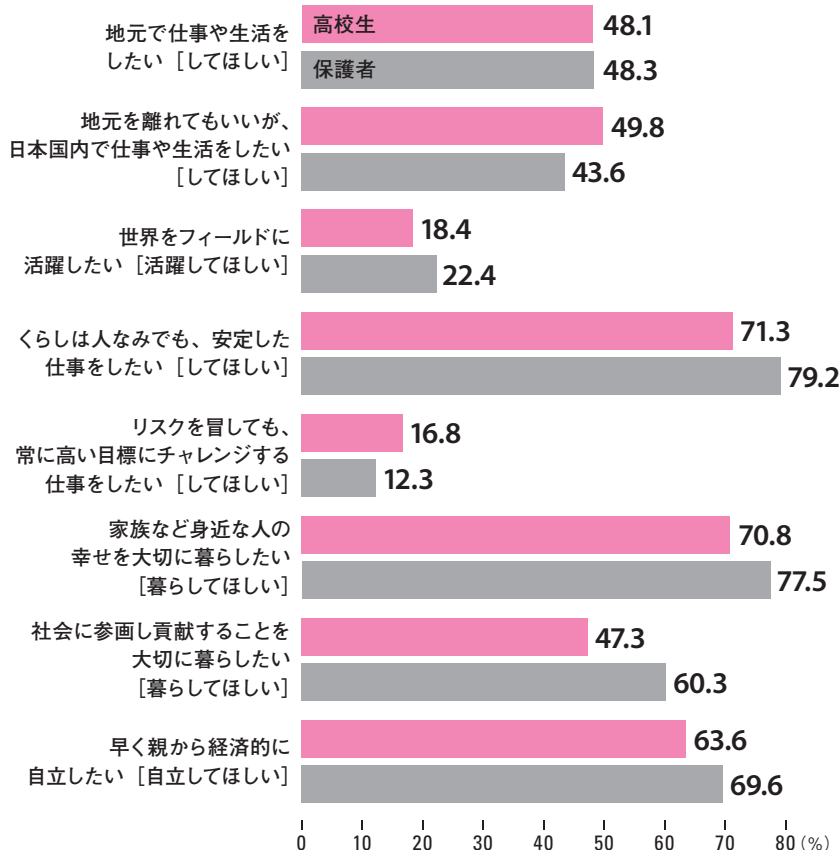
Q. 地方で暮らしたいですか



出典/日本経済新聞電子版・婚礼施設情報サイト「みんなのウェディング」の共同実施によるアンケート調査(2012)  
\*同サイトに登録する20〜30代の会員を対象にインターネットを通じて2012年2月23〜29日の期間に実施。575人から回答を得た。回答者の内訳は、都会在住者(3大都市圏)72.7%、地方在住者27.3%。

図2 リスクは避け、安定した仕事、身近な人の幸せを重視する高校生

Q. あなたは、自分の[あなたのお子さんの]将来について、次のようなことをどのくらい思いますか



注1)「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。選択肢は「とてもそう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の5段階

注2) [ ] 内は保護者に対する設問と選択肢

注3) 対象は高校1〜3年生とその保護者4,647人

出典/ Benesse 教育研究開発センター「高校生と保護者の学習・進路に関する意識調査」(2011)

な人を大切にしながら、安定した生活を志向する若者の姿がうかがえる。

では、これからの地域は、そうした若者たちのニーズを受け止める環境にあるのだろうか。図3は、地域の姿を人口、高齢化率、労働力などの面から描いたものだ。3-1、3-2からは、都市部に比べて高い割合で、人口減、高齢化が進むことがうかがえる。3-3や3-4からは、日本の中での労働力、求人が都市部に集中していることが分かるだろう。3-4の求人倍率だけでは大きな差はない地域もあるが、人口、求人数には大きな差がある。これらが都市部と地方部の体力の差となり、地域の活性化の足かせとなる要因になることは想像に難くない。

このような課題に直面する地域において、「主体的に生きる」ためには、どのような力が必要とされるのだろうか。そしてその力を育むために、高校にはどのような指導が求められるのだろうか。次ページから考えていきたい。

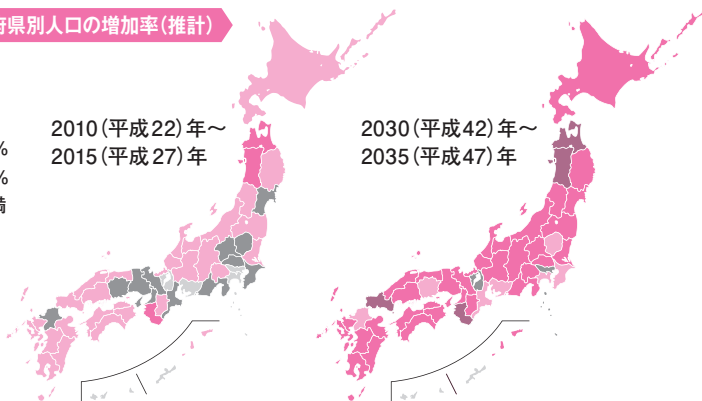
図3 地方部は人口の低下率、高齢化率が高い。労働力は都市部に集中

3-1 都道府県別人口の増加率(推計)

人口増加率  
 0%以上  
 -2~0%  
 -4~-2%  
 -6~-4%  
 -6%未満

2010(平成22)年~  
2015(平成27)年

2030(平成42)年~  
2035(平成47)年

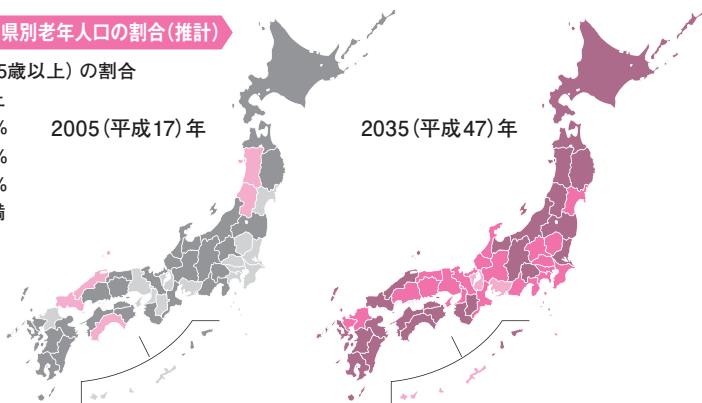


3-2 都道府県別老年人口の割合(推計)

老年人口(65歳以上)の割合  
 35%以上  
 30~35%  
 25~30%  
 20~25%  
 20%未満

2005(平成17)年

2035(平成47)年



3-3 全国生産年齢(15~64歳)人口に占める地域ブロック生産年齢人口の割合(推計)

2035(平成47)年 (%)	
北海道	3.8
東北	8.0
北関東	5.9
南関東	31.0
北陸	2.2
中部	14.0
近畿	15.9
中国	5.5
四国	2.7
九州・沖縄	11.0
合計	100

注1) 東北(青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県)、北関東(茨城県、栃木県、群馬県、山梨県)、南関東(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)、北陸(富山県、石川県、福井県)、中部(長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)

3-4 地域別有効求人倍率(2012年9月)

	求人	求職	倍率
北海道	76,236	124,440	0.61
東北	176,397	199,711	0.88
南関東	459,904	566,743	0.81
北関東・甲信	149,610	180,844	0.83
北陸	97,649	105,379	0.93
東海	238,452	249,102	0.96
近畿	316,891	416,662	0.76
中国	135,379	146,838	0.92
四国	70,733	83,833	0.84
九州	221,067	332,300	0.67

注1) 東北(青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県)、南関東(埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県)、北関東・甲信(茨城県、栃木県、群馬県、山梨県、長野県)、北陸(新潟県、富山県、石川県、福井県)、東海(岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)、九州(福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県)

出典/3-1~3: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の都道府県別将来推計人口(平成19年5月推計)」(2007)、  
 3-4: 厚生労働省「職業安定業務統計」(2012年9月分)

# 3人の 生き方から 考える

## 地域に生きることの価値、 地域に生きる人に必要な力

グローバル化する日本社会において、主体的に「地域に生きる」ためには何が必要なのだろうか。ローカルな生き方を「閉じられたもの」ではなく、「大きく開かれたもの」として捉え、それぞれの地から新しい価値観を発信する3人の生き様から考える。

島に生きる  
鹿児島生

### 海外に出たことで見えてきた 鹿児島と日本の魅力、 自分の生き方

イギリスケンブリッジ大 在学

岡本尚也

ちらん  
知覧で、ケンブリッジで、  
生き方を考えた

高校卒業までずっと鹿児島で暮らしました。鹿児島での価値観が全てではないはずだと感じていたこともあり、東京の大学に進学したのですが、確かに鹿児島とは違う価値観が存在することを実感しました。そし

て、「海外に出れば、もっと多様な価値観に出会えるはず」と海外留学への思いが高まってきました。大学卒業後、ケンブリッジ大で3カ月間の共同研究に参加する機会を得ました。その後、日本に戻って修士課程を修了し、2011年より再びケンブリッジ大で研究を行うことになり、今に至ります。世界中から研究者が集まるケンブリッジでの生

活はとても刺激的です。研究室はもちろん、立ち寄ったパブでも、各国から来たさまざまな分野の研究者と議論が始まります。そうした時に強く実感するのは、自分の考えを理由と共に明確に伝えることの大切さです。日本以外の国々では、学校でも職場でも、自分の考えを明示できない人は、極端に言えば、存在しないものと見なされてしまうからです。そして現実には、多くの日本人が自分の考えを論理的に伝えることが出来ず、苦勞を強いられています。ただ私は、自分の意見を明らかにすることに、抵抗感を持っていません。私は日本にいる頃から、「それが普通」「みんなそうする」などと言われることに対して、「本当にそ

うなのか」と自分が納得するまで考えていました。「みんなそうする」という理由だけで受け入れるのは、自分の生き方を他者に委ねてしまうことになると思ったからです。

私の考え方に大きな影響を与えたのは、地元・鹿児島の知覧特攻平和会館です。学校行事やプライベートで何度も訪問しましたが、特攻隊員の方々の歴史に翻弄された人生、尊い命の輝きに触れ、家族や友人、恋人との絆の大切さを再認識すると共に、「自分の人生」についても考えるようになりました。さまざまな選択肢が目の前にあり、「自分の人生」を考えられる時代と境遇に心から感謝すると共に、「自分という人間はこの世にたった1人なのだから、人



おかもと・なおや

◎1984年生まれ。鹿児島県・私立 鹿児島修学館高校卒業。慶應義塾大理工学部卒業。同大大学院理工学研究科修士課程修了。公益財団法人・船井情報科学振興財団奨学生として、イギリス・ケンブリッジ大 物理学部キャヴェンディッシュ研究所において博士課程在籍中。Connect the Dots 運営委員。



## 海外に出て見えてきた 地域の魅力と自分の使命

自分に出来る社会貢献は何か。その道筋が見えてきたのは、海外で学ぶようになってからです。

ケンブリッジ大には、120以上

生を自分で切り拓くのは当然だ「自分に無欲に、大きな志を持ち、社会と歴史に対して精いっぱい貢献をしよう。そして、その実現のために、自分の個性、能力を磨き続けよう」と考えるようになりました。

の国から学生が集まっており、互いの国についてよく話をします。そこで私は、日本の「普通」は世界の普通ではないことを知りました。また一方で、経済的に豊かで、便利で、安全で、公教育が行き届いた日本は、国際社会では希有な国であると、世界の中の「日本」を発見しました。そして同時に、故郷である鹿児島の良さにも改めて気が付きました。人と人とのつながりや受け継がれてきた伝統・風習、美しい自然など、世界にも誇れる魅力が鹿児島にはたくさんあります。海外に出たこ

とで、日本、そして鹿児島の価値を再発見したのです。

若者がいったん海外に出ると、日本に戻りたくなくなってしまうのではないかと考える人もいるようです。でも、私の知る日本人はそうではありません。彼らは、外に出るとでさまざまな問題を抱える故郷や日本について自分なりに考え、自分の役割を知り、社会に貢献したいという気持ちを抱くようになっていきました。私も、鹿児島と日本の素晴らしさを守り、もっと良くすることが、自分の使命だと信じるようになってきました。そして、その手段を模索していた時、SSHの取り組みでケンブリッジを訪れた日本の高校生との交流を経験しました。彼らと接し、自分に出来る貢献は若い人たちに刺激を与えることではないかと思うようになったのです。

日本の高校生は世界でもトップクラスの基礎学力を持っており、グローバルに活躍する素質を備えている若者はたくさんいると思います。しかし、多くの高校生には、「今の

自分」と「世界で活躍する未来の自分」を結ぶ道筋が見えていませんし、世界というものを知ることなく、それぞれの地域で生活している。そうしたどこにでもいる普通の、しかし大きな潜在能力を持った

### Connect the Dotsの活動

#### 世界で活躍する若手日本人との出会いを通して グローバルに挑戦するきっかけを高校生に与える

11年よりイギリス・ケンブリッジ大において、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）より派遣された高校生と日本人留学生との間で、グローバルに活躍する研究者になるためのキャリアパスなどに関するセッションが行われた。高校生が大いに刺激を受ける様子を見た岡本さんらは、高校生と世界の距離感を縮めるために、世界で活躍する若手日本人が日本の高校を訪問してセミナー・ディスカッションを行う非営利団体、「Connect the Dots」を設立。全国のSSHや進学校を中心に活動を行っている。

Connect the Dots Webサイト <http://www.ctd-japan.org/>

高校生に、海外に出るといふ選択肢が決して特別なものではないことを伝えたいと思いました。彼らに、世界という大きなキャンパスに自分の夢を描き、その実現に向かって邁進してほしい。将来、世界に貢献しながら、国際社会の中で輝く日本、そして地域の担い手となってもらいたい。そんな期待から、政治・ビジネス・学術など、さまざまな分野において世界中で活躍する若手日本人たちと共に、非営利団体「Connect the Dots」を立ち上げることにしたのです。

## 対話の中で 生徒は生き方を考える

私は、自分を知ることと、地域、日本を知ることとはよく似ていると思います。どちらも閉じられた状態では価値が見えにくく、視野を広く持ち、他と比べることで本質が分かってくるからです。社会に「自分」という人間が1人しかいないように、鹿児島という地域も日本という国も唯一の輝きを持っています。地域がそれぞれの輝きを生かして活性化し

ていくことは日本全体の活性化につながるかと、私は確信しています。

もちろん、地域が抱える課題は難しいものばかりです。鹿児島でも、シャッター街の増加や大手メーカーの工場撤退などが進んでいます。しかしそれでも、多様な世界の存在を知り、故郷の良さを再発見した若者たちが、本気で地域の活性化に取り組みば、地域に新たな可能性が開けるのではないかと思うのです。

とはいえ高校生にとっては、海外研修などに参加し、地域の外に出ることは簡単なことではありません。だからこそ学校の先生方には、授業の中で多様な世界があることを伝えていただきたいと思っています。私たちがのような団体を活用することも1つの方法でしょう。広く世界で活躍する人たちとの対話は、高校生にとって自分の生き方や地域のあり方を考えるきっかけになるはずです。

対話は学びの原点です。ケンブリッジやオックスフォードなど、世界の大学が対話を重視するのは、語り合うことで自分の考えが明確になったり、新たな考えが生まれたりするからです。高校生にとって最も

身近な対話の相手は、友人であり、先生です。先生が勉強の意味について語り、そして地域や国、更に世界の一員としての自分の思いを語ることで、生徒も地域や国への思いを語り始めるのではないのでしょうか。国際問題であっても地域の問題であっても、正解が用意されている間



## 地域での日常の中に 見過ごされていた価値を見だし、 育っていく

味匠「きつ川かわ」専務取締役

吉川真嗣きつかわしんじ

### 地元が嫌いな私が、 地元のために動く

新潟県下で最も古い城下町・村上で、道路の拡幅を伴う大規模な区画整理事業が行われ、私の住む旧町人町もその対象であることを知ったのは1997年のことです。兄の代わりに、家業の鮭の製造販売業を継ぐため、やむをえず商社を辞めて、東

題は残念ながらありません。答えは誰にも分からないからこそ、先生方には、「私はこう思うけど、君はどう思う？」と教室で生徒と語り合っていたらいいと思います。そういう時間の中で、日本の若者は自分を信じ、自らの道を切り拓いていく力を身に付けるはずですよ。

京から戻り、7年が経った頃です。

当時の私は家業のことで頭がいっぱいで、地域の問題に対してあまり関心を持っていませんでした。町の寄り合いに出ても、黙って話を聞くだけ。商店街の付き合いも、極力避けていました。私はもともと、地域の閉鎖的な気風が嫌いで、中学生の頃から「この地域から出たい」「将来は国際的な仕事が見たい」と思っていました。父親のため、家業を守



きっかわ・しんじ

◎1964年生まれ。新潟県立村上高校卒業。早稲田大商学部卒業。東京での商社勤務を経て、村上の伝統的な鮭食文化を礎とした鮭製品製造加工販売を行う家業の「蛸っ川」に勤務。村上の町おこしにおいて中心的役割を担い、手掛けた活動は内閣総理大臣賞など数々の賞を受ける。国土交通省より「観光カリスマ百選」に選定されている。

るため……そう納得して村上に戻って来ましたが、地域に対して積極的にはなれませんでした。

ある時は、伝統的な建築物や町並みを保存する全国的な組織の方と出会いました。何げなく村上の状況を話したところ、その方は「城下町を壊して道路を拡張しても、ただ車が通り過ぎるだけで商店街は逆に衰退する」と血相を変えて反対しました。そればかりか、「取り返しがつかなくなる前に、あなたが食い止めなさい」と言うのです。

近代化で町が活性化すると思っ

いた私は驚きました。しかし、もしこの話が本当なら大変なことになる……。私は実際に近代化をした町がその後どうなったかを調べました。そして、自分の住む地域がどれほど大変な事態に直面しているのかを理解したのです。

これまで町のことに関心を持ってこなかった自分に、今更何が言えるのか？ 近代化に向けて必死になっている人たちが、自分の言葉に耳を傾けてくれるのか？ 私は悩みました。しかし、最後には「このことを伝えなければ一生後悔する」と近代

化に反対の声を上げることを決意したので。

しかし、私の言葉は全く受け入れられませんでした。それどころか、近代化反対の署名活動を始めた私は、町の人たちからの猛反発に遭ってしまいました。それまで町のために汗をかくこともなかった私が、町を活性化しようと頑張ってきた人たちに、いきなり「あなたたちは間違っている」と言ったところで、耳を貸してもらえないのは当然です。署名活動は中止に追い込まれました。

### 捨てようとした日常に 他にない価値があった

最初の挑戦は失敗に終わりましたが、気づきもありました。それは、「近代化反対」を唱えるだけではダメで、町の活性化につながる別の手段を提案する必要があるということです。もしもそれが、捨て去ろうとしている古い町の価値を生かした案であれば、人々の意識を変えられるのではないかと。そう考えた私は、

#### 城下町・村上の町おこし

### 町の財産を生かして観光客を集め 市民参加の活動で町の再生を更に進める

城下町・村上に近代化計画が持ち上がったことをきっかけに、吉川さんが伝統的な町屋を生かした町づくりに取り組み。昔ながらのイロリや梁、吹き抜けなどのある町屋内部の魅力を、観光客が体感できるイベントを次々に発案。「町屋の人形さま巡り」(3月上旬から1か月)、「町屋の屏風まつり」(9月中旬から1か月)などで町は賑わいを取り戻した。昔ながらの黒塀のある景観を復活させるため、市民から黒塀1枚1,000円を募り、市民自身が制作を行う「黒塀プロジェクト」も行っている。

村上のまちづくり <http://www.k-shinji.info/>

村上の良いところを探そうと町中を歩きました。でも、どこにでもあるくたびれた町に、誇れるものなど見付かりません。

ところが、ある時は、私の店を訪れるお客様たちが、吹き抜けの天

井、イロリや仏壇、神棚のある古い町人町の町屋の内部を見て、「江戸時代にタイムスリップしたようだ」と感動していることに気が付きました。村上の住民にとっては日常生活の空間であり、ただの古い家である町屋を、外部の人の目を借りて見ることで、それが価値ある宝だということが分かったのです。

私は、旧町人町の商店を回り、観光客に町屋内部を公開してくれるようお願いしました。そして、賛同してくれた22店の場所を記した手書きの町歩きマップを作成し、近隣の市町村に10万部配布したのです。

マップを手に町歩きする人が少しずつ増えていくのを見て、もっと強い光を町屋に当てようと決意した私は、妻と全国の町おこしを訪ね、いろいろな企画のアイデアや進め方を学びました。そしてそれを土台に、家々に伝わる江戸や明治の人形、屏風を町屋の生活空間の中に飾る「町屋の人形さま巡り」、「町屋の屏風まつり」を企画しました。予算もノウハウもありませんでしたが、「これが成功すれば町の人たちが町屋の価値を認めてくれるし、村上の明日が

拓ける」と信じ、絶対に成功させようと無我夢中で取り組みました。

結果的に2つのイベントは全国から大勢の観光客を集めることに成功しました。この他にも町屋を舞台にした手作りのイベントを次々に実施し、村上の町おこしは全国の注目を集めるようになるのです。

閑散としていた町に多くの観光客が集まるようになったことは素晴らしいことです。しかし、それ以上うれしかったのは、町の人々が次第に自分たちの暮らし、地域を誇りに感じるようになってきたことです。「うちは町屋ではなくボロ家」と笑っていた町のお年寄りが、町屋を見るために遠くからやって来た観光客に、町屋と村上の魅力について一生懸命説明している様子を見た時には、私は心から感動しました。

### 人のため、地域のためなら強くなれる

村上の町おこしはわずか十数年の間に大きな成果を収め、今では賛同者も増え、組織も出来ました。でも、私の活動は町の人たちからずつと否

定的な目で見られていました。地域の人たちは変化を恐れ、自分と違ったことをしようとする人を受け入れるのに時間が掛かります。活動を始めて10年くらいは、私は本当に孤独でした。私自身は、さまざまな催しを成功させたことよりも、孤独に耐えたことを評価したいと思っっているほどです。私が孤独に耐えることが出来たのは、全国の町おこしの現場から勇気をもたらしたからです。私も大変な中で頑張っている人たちのことを思い出すと、もっと頑張れるという気持ちになりました。そしてもう1つ、リーダーシップ

も斬新なアイデアもない私が、四面楚歌の中でもくじけずに意志を貫き通せたのは、自分の欲得ではなく、皆のためだと信じていたからです。

私が町屋の重要性に気付いたばかりのころ、市長や観光関係者が集まる集会がありました。会場からの意見を求められた時、私は初めて町屋の重要性を話しました。マイクを手元に100人の前で話すのは、当時の私にとって極めて勇気のいることでした。緊張で震える左手を右手で支えながら、町屋の重要性を訴えました。格好悪くても構わない。今ここで、地域のために、町屋の重要性を

### 村上の町おこし



「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風まつり」では、江戸や明治のたたずまいを残す町屋の内部を見学できる



城下町らしい景観を取り戻すため、「黒塀1枚1,000円」の寄付を募り、市民がボランティアで黒塀を作るプロジェクトも進む

訴えなければいけないという気持ちですが、私に自分の壁を乗り越えさせたのでしよう。自分のためには強くなれなくても、人のためには強くなれる……これこそが人間の強さの本質だと思います。

私は、全国それぞれの地域が、日本、そして世界に発信できる素晴ら

福岡県津屋崎に  
生まれる

## 対話を通して新たな価値を創る 「グローバルマインド」こそ これからの地域に必要な

NPO法人地域交流センター津屋崎ブランチ代表

山口 寛

### 地域に根を下ろして 本当の町づくりを目指す

大学を卒業後、東京の大手総合建設会社に入社した当時、建設業界は長野オリンピックに向けた建設ラッシュに沸いていました。私も競技場の建設に携わるなど、楽しく仕事を

しい価値を持っていると信じています。地域の文化は、そこに生まれ、育った者にとっての大切な根っこです。この根っこがしっかりとしていれば、どこにいても自分を恥じることはありません。自分を誇れる人は堂々とした態度で、世界中の人と深く接することが出来るはずです。

していましたが、次第に箱物を中心に据えた「町づくり」に違和感を感じようになりました。

地域が元気になるために本当に必要なものは何か、私は考えました。道路を拡幅したり、新しい建物をつくったりすることだけで、本当にその地域は活性化するのか。地域に必要なのはハードの充実以上に、1人

でも多くの若者が都会から戻って来る仕組みではないかと私は考えるようになり、そのためのソフトの整備に取り組みようと、全国で地域活性化事業を展開するNPO法人に転職したのです。

地域の人と一緒に働く日々は充実していました。でも、プロジェクトが終われば、その地域の変化を見届けることなく、別の地域へ移らなければなりません。ハードからソフトへと仕事の中身は変わっても、自分の地域へのかかわり方は何も変わっていないことに気が付きました。



やまぐち・さとる

◎ 1969年生まれ。福岡県立八幡高校卒業。九州芸術工科大(現・九州大)芸術工学部卒業。東京の大手総合建設会社で都市デザイナーとして町づくりに携わる中で、地域の活性化に関心を深める。2002年NPO法人地域交流センター理事となり、2009年津屋崎ブランチを設立。津屋崎に移住し、新しい町づくりの形を提唱している。

地域の中で積み重ねられてきた時間を受け継ぎながら、町づくりを行い、その成果を更に地域の中でじっくりと育てていくべきではないか。やはり、いつかは自分の地元である九州、福岡の地に根を下ろしたい……そう思い始めた矢先、NPO法人が福岡県福津市から、玄界灘に面した津屋崎の町おこしに関する業務を受託しました。プランの立案を自ら行い、その中には「私自身が津屋崎に移住し、町づくりに参加する」という一文も盛り込んでいました。このプランが採用されたため、私は

2009年にNPO法人の支所として「津屋崎ブランチ」を設立し、津屋崎に移り住んだのです。

## 都会よりも地域にこそ アイデアが必要

都会から抜け出し、美しい自然と温かい人情に包まれて暮らしたいと願う人は少なくありません。しかし、地域経済は停滞し、人口は減少しています。空き家や空き地が多くなり、地域ならではの景観やコミュニティの維持も難しくなっています。では、地域は衰える一方なのか？ 私はそうは思いません。都会の理屈で考えることをやめることで、地域再生のあり方が見えてきます。

例えば、過疎化が進む地域では、何十万円もの月収を得られる仕事は確かに少なくなっています。しかし、月に5万円を得られる仕事が4つあれば生活は出来ます。「複業」という考え方です。私が所属するもう1つのNPO法人では、福津市と共に町づくりの一環として、「福祉プチ起業塾」を毎年開催しています。既に10人以上の小さな起業家が

生まれています。さらに今年は、同じ福岡県の大刀洗町が「まちの小さな起業塾」を開催しました。工場を誘致できなくても、100種の仕事が営まれるようになれば、田舎の良さを保ったままで経済は活性化し、地域の生活は賑わいます。「経済」と「地域の良さを生かした生活」の両立に向けての挑戦が、小さな自治体で始まっているのです。

「古民家再生」も、地域の活性化につながる重要な取り組みの一つです。空き家を壊すことなく移住者を迎えることが出来れば、昔ながらの景観を保ちながら町に賑わいを取り戻せるからです。しかし、現実には大がかりな改築が必要で、また、代々伝わる家を勝手に渡したくないという人も多く、古民家活用は全国でもなかなか進んでいません。そこで私が考えたのは、家主に負担を掛けずに家を改装し、一定期間借りた後に返却する事業モデルです。利用者に先払いしてもらった数年分の家賃を原資に改築を行い、家主とは期間限定の借家契約を結ぶというものです。津屋崎でもこの春、30年間も空き家だった古民家が、12人の出資者

の協力で6年間限定の宿泊施設として生まれ変わったばかりです。

過疎化や高齢化、空洞化など、複雑な問題を抱える地域に生きる人にとって、ゼロから1を生み出すような発明の力が必要だと私は思いますが。もちろん、ゼロから生み出すことだけではなく、既存のものを組み合わせ、新しい価値を生み出すのも発明です。そしてそれが出来るのは、広く世界を見て、現代社会の仕事の仕組みを深く理解した上で、それでも従来の価値観にとらわれずに自分の見方、考え方が持てる人だと思えます。だから私は、都会の楽しさ、便利さを理解して、なおも自分の感性で地域を選べる人に魅力を感じます。私自身、東京での社会人経験があったからこそ、「日本の地域はこのままではいけない」と思うようになったのですから。

## 仲間がいるから 私は地域で頑張れる

町おこし、町づくりを仕事とする私ですが、「地域ブランド」という言葉は好きではありません。この言

葉の裏に、「よそを蹴落として自分たちが勝とう」という競争の論理を感じるからです。地域も人も、他と比べながら自身の価値を追求している限り、いつも焦りを感じることに限り、本当に幸せにはなれません。他者と比較し、競争する考え方とは一線を画す、別の行動哲学を地域は

### 津屋崎ブランチの活動

#### 移住希望者の支援など町づくりのための活動を展開

福岡市と北九州市の中間に位置する福津市は、2005年に福岡町と津屋崎町が合併して誕生した。旧福岡町は、JR福岡駅を中心としたベッドタウンであるのに対し、旧津屋崎町は、ウミガメが産卵する砂浜やカブトガニが生息する干潟を持つ自然豊かな場所である。旧津屋崎町に移住者を受け入れるための仕組みづくりや、町づくりに関するワークショップ・交流会などを行うことを目的に、NPO法人地域交流センター津屋崎ブランチが設立された。現在、山口さんのほか、全国から公募された3人のスタッフが働いている。

津屋崎ブランチ <http://1000gen.com/>

率先して持つべきだと思えます。

津屋崎ブランチの町づくりには、3つの指標があります。それは「100年前でも通じること、100年後でも通じること、他の国でも通じること」です。効率性や流行ではなく、不易を追求することが地域における行動哲学であり、不易であるからこそ他の地域の共感も得られるはずで。そうして、それぞれの地域が競争するのではなく、仲間になって日本全体を底上げしてい

きたい。だから津屋崎の成功手法は、出来る限り多くの地域に取り入れてもらいたいのです。

また私は、地域に住む者として仲間づくりを強く意識しています。かつて私は、「紛争や飢餓で命を失う人が世界にたくさんいるのに、町づくりに取り組むのは偽善ではないか」と悩んだ時期があります。でもこの悩みは、お互いの努力を認め合える仲間がいれば解決することに気がきました。国際機関で働く友人に

「僕の出来ないことをしてくれてありがとう」と感謝し、そして友人も私のしていることを認めてくれる。農業、福祉など、さまざまな分野で頑張る人たちと仲間になることで、自分は自分の目の前の仕事を頑張ろうと思えるようになったのです。

仕事の内容や働く場所が違って、お互いを認め、仲間になれる感性を持つ人……私はそれがグローバル人材だと考えます。地域や世界に広く目を向けながら、自分の役割を果たし、社会に貢献できる人です。

全国には、町づくりに取り組む仲間がたくさんいます。彼らは、未知の価値観と向き合った時にも、それを否定せずに、なぜそうなのかを考えようとしています。「どちらが正しいか、討論して白黒をつけよう」と価値観をぶつけ合うだけでは、敵をつくったとしても新しいアイデアは得られません。しかし、お互いの価値観を認めた上で、なぜ違うのかを対話を通して探究することで、新しいアイデアが生まれます。地域が抱える高齢化や空洞化、さらに原発の是

非のような問題は、対話の中で解決策を考えるしかないと思います。そして、そうした対話の姿勢を育むことが、これからの教育の役割ではないでしょうか。

グローバル人材は、視野を広く持っているのと同時に、自分が小さな人間であることを知っている人です。学校であれば、生徒が自分の価値観とは違う生き方を語る時に、頭ごなしに否定するのではなく、「なぜそうした考えに至ったのか」「自分の知らない世界を知っているのではないか」と生徒との対話の中で新たな価値観に迫っていく教師の姿ではないでしょうか。

自分の価値観を提示しながら、多様な価値観を認める教師の姿勢から、生徒はきつとグローバルマインドを感じ取るはずで。そうした大人との対話を通して若者たちは、今の世の中で要領よく生きていく力ではなく、今の世の中を変えていく力、地域を元気にしていく生き方を志向するようになるのだと信じています。

## 津屋崎の町づくり

### 「福津プチ起業塾」

地域の小さな町ならではの温かな人間関係の中で、仕事と暮らしを無理なく両立することを目指し、複数の仕事で生活していく複業モデル、「プチ起業」を提唱。福津市や大刀洗町、福岡大学などで市民講座を開催している。津屋崎の古民家を利用して営業する「Cafe and Gallery 古小路」もこの塾から誕生。紅茶店、手作りパン店、おにぎり店、カフェ、食堂など、日替わりで店長と屋号が替わる。このほか、さまざまな部活動のあるカフェやおしゃれな看板店などのプチビジネスが誕生している。

### 「古民家再生」

津屋崎漁港一帯の「津屋崎千軒」と呼ばれる集落には、現在、50軒を超える空き家がある。古い家屋の体裁を守りながら移住者を受け入れることで、昔ながらの景観と地域のつながりを維持できる。そこで津屋崎ブランチでは、移住希望者と家主をマッチングさせた上で、改修を進めるプロジェクトを実施している。



## 学校現場から 考える

地域に悲観させたま  
卒業させたくない

——まず、先生方の地域の生徒の志望の特徴を教えてください。

**杉山** 高知県の公立高校の生徒は、地元志向が強いと思います。本校では、生徒の約半数が中・四国の国公立大志望です。人気があるのは高知にも近畿にも近い広島大、岡山大です。出来れば地元で暮らしていきたいと思っっている生徒は多いと思いますが、他の地域と同様に、就職先は豊富ではないのが現状です。

**松井** 北海道の生徒が道外に出るのであれば、東北よりも空路が充実している関東の方が便利です。だから

# 生徒との真摯な対話が 地域を創る新しい価値観を育てる

主体的に地域で生きることを選び、地域を創っていくことが出来る人材を育てるためには、どのような指導をしていけばよいのか。グローバル化する社会の中での地域のあり方や、学び方の可能性の広がりやを踏まえ、高校教育の次代を担う世代である2人が語る。



「誇り、愛着を  
育むためにもっと  
地域のことを教えたい」

生徒は、進学するなら道内か関東という意識を持っています。ただ、道内は今景気が冷え込み、就職先が少ないことを生徒は知っています。そうしたことと暮らしていきたくないと町にずっと暮らしていきたくないと考えている生徒は少ないでしょう。

**杉山** 東京や大阪に比べれば就職先は少ないですが、地方にも頑張っている企業、世界に誇れる企業はあります。でも、生徒はそうした事実をほとんど知りません。私も、生徒と

大学について話すことはたくさんあります。

ですが、将来どんな会社に勤め、どこで生活したいと考えているかまで話が及ぶことはあまりありません。もちろん、そうしたことを本気で考えるのは大学生になってからです。それぞれの価値観で生き方や生きる場所を決めてほしいと思いますが、少なくとも地域に悲観したまま卒業させたくないと考えていることがあります。自分の地域でも、誇りを持って働いている人がたくさんいる

### 高知県立高知追手前高校

- ◎設立 1878 (明治11)年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎12年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、東京大、大阪大、岡山大、香川大、愛媛大、高知大などに146人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大、松山大などに265人が合格。
- ◎住所 〒780-0842 高知県高知市追手筋2-2-10
- ◎電話 088-873-6141
- ◎Web Site <http://www.kochinet.ed.jp/otemae-h/>

### 北海道旭川東高校

- ◎設立 1903 (明治36)年
- ◎形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎12年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、旭川医大、北海道大、北海道教育大、東北大、東京大などに178人が合格。私立大は、北海道医療大、中央大、東京理大、明治大、早稲田大などに327人が合格。
- ◎住所 〒070-0036 北海道旭川市6条通11丁目
- ◎電話 0166-23-2855
- ◎Web Site <http://www.asahikawahigashi-h.ed.jp/>

高知県立高知追手前高校

## 杉山太夏子

すぎやま・たかこ

教職歴15年。数学科。高知県立宿毛高校、高知県立橋原高校を経て、高知県立高知追手前高校へ。同校に赴任して9年目。2学年担任。企画研修部所属。



北海道旭川東高校

## 松井恵一

まつい・けいいち

教職歴15年。公民科。北海道旭川東高校を経て、北海道旭川東高校へ。同校に赴任して9年目。進路指導副部長。

ことを教えることで、地域も選択肢の1つになると思います。

### 教師の生徒へのかかわりが 地域への愛情を育てる

**松井** 先日、就職1年目の卒業生が本校を訪ねてきました。その子は、自分の視野を広げたいと東京の大学を選んだのですが、東京で多くの時間を過ごすにつれて、北海道に戻りたいと思うようになったそうです。私が「でも、北海道には何もないよ」と冗談めかして言うと、「東京にはない豊かな自然や生活がある」と言うのです。地域の魅力を堂々と語る教え子がとても誇らしく思えて、別れ際、「今日は君に勉強させてもらった」と礼を言いました。

**杉山** 外から見た方が、そこにどんな価値があるかが分かるのですね。自分にとって当たり前のことほど、その価値にはなかなか気が付かない。だからこそ、一度外に出てみる必要があるのでしょうか。

**松井** その教え子も、高校生の頃は



### 「母校で頑張った 思い出をつくること」が 地域への愛着につながる

北海道には何もないと思っていたし、人間関係のしがらみもイヤだったけれど、外に出てみるとむしろ東京は空虚に感じられて、北海道の素晴らしさが分かったと言っていました。ただ、魅力に気が付いたけれど、自分が北海道に帰って来て何をすればいいのか、何が出来ることが分からないと言っています。今は、その方法を見付けようとしていて、雇用が少なければ自分で起業することも視野に入れていそうです。山口寛さん（P13に登場）のような町づくりの専門家の下で勉強することも考えていると言っていました。

**杉山** 自分が生きていくのは地域なのか東京なのか、それとも海外なのかを決めるのは、大学に入っているいる価値観に出会ってからです。地域を担う人材の育成という観

点から高校で出来ることがあるとすれば、それは地域への愛着を育む土壌をつくることだと思います。地域のことを知ることで、地域を誇りに思う気持ちをゆっくりと育ててもらいたい。岡本尚也さん（P8に登場）は、海外で生活するようになって鹿兒島の良さが分かったということですが、これも岡本さんが鹿兒島のことをよく知っていたからでしょう。

**松井** 確かに地域に愛着を持たなければ、いくら地域の人々が「戻って来てほしい」と願っても、若者は外に出て行ったままです。地域への愛着を育むために、教師が出来ること……それは、生徒に頑張った思い出をつくらせることではないかと思えます。生徒は、自分が頑張った場所だから、地域に戻ってくる。だとしたら、教師が授業や部活動で一

特集

「主体性」の育成

②

地域に生きる人材を育てる



## 「学び続ける力、 知識を組み合わせる力を 授業の中で養っていききたい」

生懸命生徒にかかわることが、地域への愛着を育むことにつながるはずです。

**杉山** 本当にそうですね。東京大に現役合格した教え子が「追手前あつての今の自分だから、追手前のためには何でもします」と話してくれたことがあります。学校、地域に育てられたという感謝の気持ちがあるから、地域に貢献しようと思うのでしょう。だから私たちが生徒に一生懸命にかかわることが、私たちの出来る地域貢献だという気がします。

### 共感する力を高めて 社会貢献意識を具体化する

**松井** 最近の生徒に感じるのには、一見、積極性に乏しいけれど、実は社会貢献の意識を内に秘めているという事です。本校に勤務して今年で9年目ですが、赴任当初に比べ、将

来の大きな夢を語る生徒は減りました。「最近の生徒は自己主張しなくなりましたね」と先輩の先生と話すこともあります。でも、面談などでじっくり話していくと、少しずつ自分の思いを語り始めるのです。表面的にはおとなしいけれど、内面には「社会のために何かしたい」という思いを持っているのではないかと。ただ、自分に何ができるのか、自分の気持ちをごんごんな言葉で表せばよいのか分からないのではないかと思うようになりました。

**杉山** 進路志望調査などで「人の役に立ちたい」といった思いを書く生徒は多いですね。思いやりがあったり、クラスの中でも譲り合ったり、助け合ったりして、身近な人への気配りはとてもよく出来ます。でも、離れた場所にいる人への共感や、それを源とする行動力はもっと強く持たせたいと感じます。例えば、東日

本大震災の被災者の方の苦労は頭では理解できても、被災者と今の自分を結び付けて、自分の行動まで考えてみるのがなかなか出来ません。社会の役に立ちたいという思いを秘めた生徒が、自分には何が出来たのかをことん自分に問いつける機会をつくることも、私たち教師の役割ではないでしょうか。だから私は、何とかして生徒を東北の被災地に連れて行きたいと思っています。現地に立ち、被災者の方の思いに強く共感することで、社会貢献への思いをどう具現化すればよいのかが見えてくるのではないかと思うのです。

——**吉川真嗣さん**(P10に登場)は、「人のためだったからこそ頑張れた」と貢献の意識が大きな行動力となったと強調しています。

**松井** 生徒に社会貢献の思いを具現化する方向性が見えれば、強固な進路意識が醸成されます。本校は、地域医療を支える人材を育てる医進類型指定校に認定されていることもあり、「医師が不足している北海道に貢献するため、医学部を目指す」という生徒がとて増えました。

**杉山** 医師や教師などは社会への貢

献の仕方が分かりやすいですが、その他の仕事もそれぞれの社会貢献を行っていることが生徒にはイメージしにくいようです。例えば、「総合的な学習の時間」などで職業体験を行う際に、興味を持っている職種ではなく、あえてよく知らない職種を体験させて、社会の中でどう役立っているのかを気付かせるような取り組みが必要なのかもしれません。自分に合った仕事を見付けるための体験ではなく、職業への視野を広げて、働く喜びとは何かを深く考える



ための体験です。

## 問い掛け続けることで 新しい価値観を育てる

**松井** 地域への貢献は日本、そして

世界に、海外での貢献は日本、そして地域につながることをイメージできる力も生徒に持たせたいです。今は海外で働いていて、地域からは離れていたとしても、それでも地域とつながることは出来る。山口さんは仲間の言葉があったから、それを想像することが出来たのでしよう。

**杉山** 変化の激しい時代においては、地域で働くにしても、世界で働くにしても、一度選んだからといってそれはずっと固定されるものではありません。世界と地域、両方の状況を知っておくことが、これからの生徒たちには不可欠だと思います。**松井** 生徒に求められるのは、これからどんな時代になっても、またどんな国に行っても通じる普遍的な力だと思えます。普遍的な力とは、「学び続ける力」であり、「蓄えた

知識を組み合わせる力」だと思いません。それがあって初めて新しい価値を生み出せる。だから日々の授業でも、知識を蓄えただけで終わりではないし、学びは一生続くということを生徒に訴えたいです。

——吉川さん、山口さんは、「無価値に見えるものから価値を見いだす力」や「新しい価値をつくる力」が地域には必要だと語っています。

**松井** 地域で生きることが生徒にとって消極的な選択肢ではなく、主体的に選ぶ価値のある場所になるためには、新しい価値をつくり出す力が必要です。そのためにも、私たちは生徒にもその見方を変えるような問い掛けをしていきたいと思っています。少子高齢化という現象を知っているだけでなく、それが自分たちの地域ではどんな意味を持つのか、



「社会が変化する中、  
生徒と対話し続ける力を  
持った教師でありたい」

少子高齢化の状況を変えるためにはどんな方策が考えられるのか、あるいは少子高齢化は本当に悲観すべきことなのか……など、多様な見方、分析が出来る力も普遍的な力だと思います。「君はどう考える?」という問い掛けを大切にして、生徒からも「先生はどう思いますか?」という言葉を引き出していきたいです。

**杉山** 授業を通じた生徒と教師の対話ですね。それを実現するために、教師自身が視野を広げ、異なる価値観を受け入れる姿勢を持つべきですね。もつと社会のことを勉強しながら、同時に岡本さんが立ち上げられた団体のような外部の力も積極的に借りていきたいと思っています。グローバル化して異なる価値観に触れやすくなった社会だからこそ、教師の工夫次第で新たな見方を身に付け

させやすくなるはずだと思います。

**松井** 先日、全国の同世代の高校の先生方とお話しする機会があり、「生徒の多様性を否定せずに受け止めてみよう」という話になりました。それを心掛けるようになると、実は生徒はいろいろなことを考えていることが分かるようになったのです。もしかすると私は、これまでは生徒に自分の考えを一方的に伝えていたのかもしれない。生徒に対する私自身の見方を、もつと深めていかなければいけないと実感しました。

**杉山** 社会が大きく変化する中、新しい生き方を選び、挑戦しようとする生徒にどんなアドバイスが出来るのか、私たちの力量が厳しく問われているのだと思います。これまでの価値観では測れない道を選ぶようにする生徒の言葉に耳を傾け、生徒が見いだした価値と真摯に向き合う態度が、ますます大切になるはずです。教師が生徒の心の声と向き合い、対話を重ねていくことが、生徒の主体性を育むことになるのではないかと思います。



京都府立  
嵯峨野高校

課題研究

◎校是は「和敬、自強、飛翔」。大学進学後に必要な力の育成を目指して、1996年度に「京都こすもす科」を設置。2006年度に学力向上フロンティア事業の研究指定、12年度にSSHの指定を受け、国家や社会を担うリーダーとして、国際社会の平和と発展に寄与する人間の育成を目指す。

設立	1941(昭和16)年
形態	全日制/普通科・京都こすもす科/共学
生徒数	1学年約340人
12年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、九州大、京都府立医科大などに165人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ648人が合格。
住所	〒616-8226 京都府京都市右京区常盤盤ノ上町15
電話	075-871-0723
Web Site	<a href="http://www.kyoto-be.ne.jp/sagano-hs/">http://www.kyoto-be.ne.jp/sagano-hs/</a>

# 自ら課題を見つけて 研究を深める「ラボ」で 社会で生きる学力を育む

## 変革のステップ

### 背景

◎難関大合格にとどまらず、学びへの探究心を持ち、国際社会で活躍できるリーダーの育成を目指す

STEP 1

### 実践

◎課題研究を軸に、課題探究力や論理的思考力を育成。SSH指定を受け、不断の改革を進める

STEP 2

### 成果

◎学びに対する探究心や意欲が深まり、難関大の進学実績も向上。高い志望に挑戦する気概も生まれる

STEP 3

## 「京都こすもす科」の新設で 府下有数の公立進学校に

京都府立嵯峨野高校の「京都こすもす科」は、普通科目を基礎とし、それらを深く発展させた専門教育を行う専門学科だ。「大学の研究スタイルを高校教育に取り入れる」というコンセプトの下、1996年度に京都府の教育改革の一環として設置された。背景には、「公立高校の魅力をもっと高める起爆剤にしたい」という教育委員会の方針があった。当時、京都府の公立高校入試では総合選抜制度が採られていたが、京都こすもす科では、意欲と能力がより高い生徒を迎えるため、府下全域から募集が行われた。新学科設置を機に、教育内容は一新された。京都こすもす科は人文社会、国際文化、自然科学の3系統とし、課題研究や外部講師による講演会を中心とする探究活動をカリキュラムの軸とした。大学での学びに必要な課題探究力や研究手法を身に付けることを目的としている。一方、普通科はⅠ・Ⅱ類とし、Ⅰ類はいわゆる普通の公立高校のカリキュラム、Ⅱ類は京都こすもす科に準じたカリキュラムとした。

京都こすもす科は、1期生から顕著な進路実績を挙げた。例年20人程度だった国公立大合格者数は、1期生が卒業した99年度入試では100人を超え、府内公立高校トップの実績を挙げるまでに至った。浪人する卒業生は10%以

下となり、「現役合格を目指す進学校」という評価が、地域に定着していった。

## 「Sagano Dynamics」を掲げ 真の学力と難関大合格の両立へ

そうした中、専門学科新設という第一の改革に続く、第二の改革が2006年度に始まった。05年頃から生徒や保護者の難関大への関心が高まり、難関大をより意識した指導が求められるようになったのだ。小川雅史副校長はこう話す。



京都府立嵯峨野高校副校長  
**小川 雅史** おがわ・まさし

教職歴29年。同校に赴任して18年目。「常に人を育てることへの熱い情熱を持ち、一人ひとりの生徒を大切にしたい」



京都府立嵯峨野高校  
**玉村 岳** たまむら・たけし

教職歴27年。同校に赴任して13年目。進路指導部長。「学ぶとは誠を胸に刻むこと。教えるとは共に希望を語ること」



京都府立嵯峨野高校  
**河村 早苗** かわむら・さなえ

教職歴27年。同校に赴任して16年目。京都こすもす科長。教育推進部長。「一人ひとりの可能性を見つめて、力を伸ばしていきたい」



京都府立嵯峨野高校  
**林 博之** はやし・ひろゆき

教職歴20年。同校に赴任して6年目。研究開発部長。「高校生は失敗しても許されるもの。失敗を怖がらせず、質の高い経験を積ませたい」

「難関大の合格実績で高校の教育活動の評価をされるのは、厳然たる事実です。地域の期待に応えるために、更なる実績の向上を目指すのは必然的な流れでした」

難関大合格者を増やすといっても、これまで京都こすもす科が目指してきた「大学進学後を見据えた真の学力の育成」という方針に変わりはなかった。同校には、真の学力の育成と進学実績の向上は相反しないという確信がある。進路指導部長の玉村岳先生は次のように述べる。

「真の学力の育成と難関大合格というと、二兎を追うイメージがあるかもしれませんが、本校では相反しないと捉えています。基礎・基本の定着のためには反復学習なども必要ですが、一方的に知識を伝えるだけでは、生徒の学ぶ意欲にはつながりません。自ら課題を見つけて探究する力を身に付けることで、生徒は学びの深さ、面白さを感じます。もっと学びたいという意欲が芽生えれば、生徒は自ら学習に向かうようになり、結果的に難関大の合格にもつながると思います」

この時期に、生徒と教師の心を1つにするために打ち出されたのが、今も同校を貫く理念である「Sagano Dynamics」だ。京都こすもす科長の河村早苗先生は、次のように説明する。

「難関大合格にとどまらず、将来、国際社会で活躍できるリーダーや、最先端分野で未知の世界を切り拓いていく人材の育成が本校

の目標です。Sagano Dynamicsは、この実現のために、生徒と教職員が一体となり、家庭や地域をはじめ広く社会の教育力を有効に活用しながら、ダイナミックに教育活動を展開することによって、常に成長を続ける学校でありたいという思いの象徴だと思っています」

この頃、同校の実績とビジョンが評価され、京都府教育委員会「学力向上フロンティア事業」の研究指定校にもなり、第二の改革は進められていった。

## 生徒の高い志望を最後まで支援する 進路指導に転換

まず行った取り組みは、カリキュラムの改編だ。東京大・京大入試を見据え、地歴の2科目対応が一目で分かるようにし、難関大入試に対応した補習も充実させた。

教師の意識改革も進めた。教師が同じ目線で指導に当たれるよう、①自ら学ぶ姿勢の育成、②難関大に挑戦する気概の育成、③大学の先にあるものを見据えた指導の3つのビジョンを掲げた。進路指導では、生徒に安易な道を選ばせず、高い目標を貫かせる方針を共有した。当時の校長が「現役合格の数字にはこだわらなくてもよい」と明言したが、それでもこれらの方針を教師が受け入れるには葛藤があった。研究開発部長の林博之先生は次のように語る。

「担任は生徒の可能性を最大限に広げたいと思う一方で、高校3年間の成果を形にさせたいとも思っています。より高い志望を諦めさせないという方針が打ち出された時は、生徒や保護者よりも、担任が最も不安を感じたと思います」

最後まで生徒を支える担任を、学校全体で最大限に支援した。小川副校長はこう話す。

「進研模試のデータなどを基にして進路検討会を行い、時には進路指導部長が保護者に説明するなど、学校全体で担任を支援する指導体制を整えています。育てたい生徒像を共有した上で、担任に負担を集中させず、チームとして指導していくことも、進学実績の向上を支える大切な要素です」

06年度まで1桁だった京都大合格者は次年度以降10人以上で推移。志望を貫いて難関大合格を果たす生徒の増加に伴い、学校の方針は教師の間に浸透し、教師も自信を深めていった。

## 自ら研究テーマを決め 研究に必要なことも自分で探す

そして、第三の改革は、学力向上フロンティア事業の指定が終わった2年後、12年度にSSHの指定を受けたことよって始まる。

大学の研究や社会が必要となる力をより意識し、文理どちらの生徒にも科学的な素養を身に

付けさせ、グローバル化社会で発揮できるリーダーシップを育成することを重視した教育内容とした。「サイエンス英語」「ロジカルサイエンス」などの科目を設け、英語力や論理的思考力を育成。大学との連携事業、体験を重視したフールドワーク、英語集中合宿、各種のコンテストへの参加など、学びの場を広げている。

中でも中心となるのが「ラボ」だ(図)。人文社会・国際文化系統では「アカデミックラボ」、自然科学系統では「スーパーサイエンスラボ」といい、実験やフィールドワーク、課題研究などを通してテーマを深め、課題探究力を育成することを狙っている。

アカデミックラボは、1年生の専門科目だ。人文社会系統には文化学ラボ、法学ラボ、国際文化系統には英語学ラボ、異文化研究ラボなどがあり、関心に応じて1つを選ぶ。週1コマで研究を行い、レポートや論文に成果をまとめる。例えば、文化学ラボでは、祇園祭について研究。祇園祭山鉾保存会に祭りの歴史や伝統継承の意義を取材したり、着物の専門家に着付けや立ち居振る舞いを学んだりした。11年度まで同ラボを担当した河村先生は次のように説明する。

「このラボは、外国人に日本文化の底流を語れる力の育成を目標に掲げ、後半は生徒自身がテーマを決めて研究します。課題探究力の育成だけでなく、京都という地域の特性を生かした学びを通して、国際社会に発信でき

る力を身に付けることも目的です。郷土の伝統への見識がグローバル化社会には必要な教養であると、生徒が実感する場にはしています」

## 高校時代こそ 初めての体験に挑戦させたい

スーパーサイエンスラボでは、週2コマ、少人数で自然科学分野の研究を行う。1年生2学期までは、生徒全員が共通の「基礎ラボ」に所属し、数学、物理、化学、生物の探究活動に必要なスキルを習得する。1年生後半には、ラボを大まかに分類した「ラボ群」に所属し、専門的な研究・実験手法を学び、2年生からラボに所属する。次第に探究型の学びを深めていき、3年生では生徒は個々に研究を行い、成果は論文にまとめ、発表する。

生徒が最も成長を見せるのは、数々の研究発表の場だ(写真)。2年生後半からは、校内発表会やポスターセッションを開いたり、大学主催の研究会や学会に参加したりする機会がある。生徒は発表に向けて準備をする過程で、大学教員や外部講師などから厳しい意見をもらい、自身の研究の未熟さ、発表のつたなさを自覚すると共に、挫折をバネに研究を深めていく。

「生徒は、ワークショップや発表会など初めての経験ばかりで不安に陥ります。しかし、初体験への不安は、社会に出ればもっと増え



写真 30テーマにも及ぶスーパーサイエンスラボの発表会は、2年生の2学期に、1年生の他、保護者や大学関係者、地元中学校の教師などの学外の人も招いて行う。ポスターセッションでは、生徒は来場者から発表内容に対する意見を直接聞けるため、研究を更に深めるよいきっかけにもなる

図 2012年度 開講したラボのテーマ名

アカデミックラボ

- |                                                                                                                                      |                                                                                                                                                      |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>【人文社会系統】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 国語国文学</li> <li>● 文化学</li> <li>● 歴史学</li> <li>● 法学</li> <li>● 経済学</li> </ul> | <p>【国際文化系統】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 英語学I(統語論)</li> <li>● 英語学II(音韻論)</li> <li>● 英米文学</li> <li>● 異文化研究</li> <li>● 国際社会</li> </ul> |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

スーパーサイエンスラボ(ラボ群)

- 物理・工学群
- 生命・生物群
- 数理・解析群
- 科学・材料群
- 水圏・環境群

ラボは、学問分野に応じて該当する教科の教師が1~2人で受け持つ。ラボの内容や外部講師については、生徒の要望、担当教師の専門性や人脈などに応じて年ごとに変わることも多い  
\*学校資料を基に編集部で作成

時代の变化に応じて  
変わり続けたい

ていきます。だからこそ、高校時代にさまざまな体験が出来る場を設けて、新しいことに挑戦し続ける意欲と態度を身に付けさせたいと考えています」(林先生)

スーパーサイエンスラボでは、家庭科の教師が食品化学ラボを、芸術科の教師が染色科学ラボを受け持つなど、理系以外の教師が積極的にかかわるのも特徴の1つだ。教科の枠を超えて学びを広げ、深めてほしいという思いがある。

京都こすもす科の取り組みは、普通科にも波及させている。普通科II類では、京都こすもす科の大半の専門科目(ラボを除く)を履修でき、ロジカルサイエンスなどの共通科目も設置されている。ラボを担当する教師が講演やフィールドワークなどを通して得た最新の知識は、普通科I類の授業にも還元している。学校全体でSSHの指定を受け、育てたい生徒像は同じという意識が、学校に一体感をもたらしめている。

実践により、例えば、1つの発表を終えると、直ちに次の課題を見いだそうとする生徒の姿が見られるようになった。「学問への関心が高まった」「大学選択につながった」などの声も増えた。難関大に果敢に挑戦する生徒も目立つようになったという。しかし、同校の改革は終わらない。

「時代の要請に応じて『変わり続ける』ことが求められており、それを続けてきたのが本校の最大の特長だと思います。これは、無理に新たなものを増やすことではありません。本校は、教職員数が特別に多いわけではありません。そのため、それまでの個々の教育実践を学校全体のものにしていくことが大切です。試みたものがうまくいかなかった場合には取り組みをやめるなど、急激な改革にしないことも意識しています」(玉村先生)

今後の課題は、論理的な思考を伴う言語力の育成だ。自らの考えを伝えるにとどまらず、他人の発表内容を論理的に捉えて疑問を投げ掛けられる力などを育みたいと考えている。そのためにも、教師全体の指導力向上を強く意識する。12年度には、全教師でクリティカル・シンキング(\*)を取り入れた授業の研修を受けるなど、新たな挑戦が始まっている。

「今まで以上に授業研究、教材研究を行い、自らの指導力を磨いていかなければいけません。特に若手の先生には、今後ますます浸透するであろうICTを活用した指導力を身に付けてほしいと思います。また、これまで培ってきたノウハウを若手教師に継承する体制を整えることも必要です。若手の育成による新しい発想の創造とノウハウの継承が、これからの嵯峨野高校の発展を支える土台になると考えています」(小川副校長)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。  
2012年8月号指導変革の軌跡「茨城県・私立清真学園高校・中学校」など  
▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)



静岡県・私立  
加藤学園暁秀高校・中学校

進学実績向上

# 個に応じた指導と 基礎・基本の定着を徹底し 学校全体の底上げを図る

◎1926年創立の沼津淑徳女学院を母体とする。「至誠・創造・奉仕」を校訓として、人間教育、大学進学教育、国際理解教育を柱とした教育を展開。2002年にはバイリンガルクラスが国際バカロレア機構からインターナショナル・バカロレア・プログラムの認可を受けた。

設立	1983(昭和58)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約180人
12年度入試合格実績(現浪計)	<p>国立大は、北海道大、東北大、東京大、浜松医科大、名古屋大、大阪大、神戸大、九州大、静岡県立大などに54人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ465人が合格。</p>
住所	〒410-0011 静岡県沼津市岡宮字中見代1361-1
電話	055-924-1900
Web Site	<a href="http://www.katoh-net.ac.jp/GyoshuHS/">http://www.katoh-net.ac.jp/GyoshuHS/</a>

## 変革のステップ

### 背景

◎中学校で優秀な生徒が内部進学せず、公立進学校へ進むなどの影響により、難関大の合格実績が安定しなかった

### 実践

◎東京大志望者専門の講座、模試の復習、朝学習による基礎・基本の定着で、全学力層の学力向上を図る

### 成果

◎7年連続で東京大合格者が出る。国立大や難関私立大の合格者数増加が生徒や教師の自信につながる

## 中学校の成績上位層が 高校進学時に公立進学校へ流出

静岡県沼津市に位置する加藤学園暁秀高校・中学校が、指導改革に着手したのは7年前。同校は難関大や医学部の合格者を年々増やしてきたが、それは教師個々の努力による手厚い指導に負うところが大きく、東京大合格者は4年に1人出る程度で実績は安定していなかった。中学校で成績上位の生徒が高校に内部進学せず、公立の進学校に進むこともあった。進路指導部長も務める岩崎巳貴男(いわさきみきお)教頭はこう話す。

「公立の上位校と比べて、本校の進学実績に物足りなさを感じる保護者がいたのだと思います。高い志望を掲げる生徒の意欲に応えるためには、毎年東京大の合格者が出るような指導が求められており、その実現には、教師個人の力に頼るのではなく、組織的に指導する体制が必要でした」

東京大志望者の指導は、学級担任が教科担任と連携して特別補習を行う形で進めていたため、学級担任の精神的な負担が大きかった。進路指導部の大場潤(おの)先生は次のように振り返る。

「学級担任が模試の結果を見て、東京大が狙えると思う生徒を見付け、弱点となる教科の担任に補習をお願いして学力を伸ばしてもらおうという方法で、東京大合格者を出していました。組織的な指導ではなかったため、弱

点科目を克服できず、科目によって実力の伸びに差が見られることもありました」

## 東京大対策担当の教師によって 学習・精神の両面で生徒を指導

転機は7年前に訪れた。岩崎教頭の提案によ



加藤学園暁秀高校・中学校教頭

### 岩崎 巳貴男

いわさき みきお

教頭3年目。進路指導部長。「授業開始は5分前行動、終了はチャイムと同時に心掛けている」



加藤学園暁秀高校・中学校教頭

### 鈴木美和子

すずき みわこ

教頭2年目。「授業で生徒に理解させることに全力を注ぐ」



加藤学園暁秀高校・中学校

### 井堀 賢

いほり けん

教職歴19年。同校に赴任して16年目。3学年担任、進路指導部副部長。「自分自身が向上心を持って学び続ける」



加藤学園暁秀高校・中学校

### 大場 潤

おおば じゅん

教職歴・同校赴任歴共に24年。1学年担任、進路指導部。「授業がまず大切。面談では、生徒のことを思って話せば、思いは必ず伝わる」



加藤学園暁秀高校・中学校

### 市川 成美

いちかわ しげみ

教職歴・同校赴任歴共に21年。1学年担任、進路指導部。「生徒一人ひとりと真摯に向き合い、自らの人生を切り開く力を身に付けさせたい」

り、東京大対策担当の教師を5教科で選抜し、個別指導を行ったところ、生徒の力がぐんぐん伸び、東京大合格を果たした。教師たちは組織力の大切さを改めて実感し、この方法を定着させれば安定した実績を上げられるのではないかという自信を得た。以降、毎年改善をしながら、東京大対策担当の教師による組織的な指導を継続している。その流れは次の通りだ。

2年生の3学期に、進路指導部と学年団が模試の成績などを基に東京大を目指せそうな生徒に声を掛け、本人と保護者の意思を確認した上で、3月中に東京大志望者を決定。それを踏まえて、進路指導部が学年を問わず中高の全教師の中から東京大対策に当たる教師として、国語・数学・英語は各2人、理科（地学を除く）・地歴・公民は各科目1人、計十数人を選抜する。

そして、3年生の4月に放課後講習が始まる。元々、3年生は全員が放課後に講習を受けており、東京大講習もその一環だ。1日1教科ずつ、1週間に5教科を実施し、数学と英語は連続2コマ行うこともある。これを年末まで続け、セミナー試験後は個別指導に切り替える。

受験勉強を乗り切るには、生徒の精神面のケアも欠かせない。東京大講習の担当教師は、模試の結果が出る度に「スタッフ会議」を開く。「8月までにC判定に上げたい」「英語はよいが、数学が弱いので伸ばしてほしい」など、成績にかかわる情報の他、生活状況や精神面の様子も

共有する。英語担当の鈴木美和子教頭は、精神面の支援の大切さを次のように説く。

「入試が近づくにつれて、生徒の意欲はどんどん高まっていますので、あえて教師が課題を出す必要はありません。必要なのは精神面の支援です。この時期、生徒は自分で課題を見付けて頻繁に質問に来ますが、それは不安の裏返しでもあります。勉強すればするほど、自分の足りない部分が見えてくるので不安に駆られるのです。そうした時はあまり難しいことは言わずに、基礎の見直しを促したり、『このままで大丈夫』と言って安心させたりします」

スタッフ会議によって、生徒の精神面の情報も共有できるようになり、声掛けや課題量の調整などがしやすくなった。教師が与えるだけでなく、励まし支えることが、生徒にとって何よりも心強い受験指導となるのだろう。

## 先輩の実績が後輩に 受験に立ち向かう勇気を与える

東京大合格者を増やすためには、その前に東京大を目指そうと思う生徒を増やす必要がある。そのための取り組みの1つが「東大見学」だ。2年生の夏休みに希望者を募って東京大を訪れ、卒業生の現役東大生に学内を案内してもらおう。東京大を間近に見て、先輩から直接、大

学生生活や受験の体験を聞く中で、生徒は先輩を誇らしく思い、大学生活への憧れを強めていく。

正しい情報提供も欠かせない。毎年4月に開く「東大講座」では、3年生の東京大志望者と2年生の希望者を対象に、学校の指導体制を伝えると共に、東京大合格のための心得として、入試における1点の重みを伝え、基礎の重要性を説き、受験に向けて気持ちを引き締めさせる。進路指導部副部長の井堀賢先生は次のように述べる。

「東京大への思いはあっても、正確な情報を知らないために諦めてしまう生徒もいます。東京大の入学定員は100人くらいだと思います。自分はとても合格できないと思いついていた生徒もいました。東京大は単に難易度が高いのではなく、設備が充実し、奨学金も手厚いことを伝え、それを励みに頑張る生徒もいます。正しい情報を届け、生徒の志望や決意を具体化させることが、受験に向かう力になっていきます」

一連の対策の結果、改革を始めた05年度から連続7年間で東京大合格者が出た。今では、1年次から東京大を目標に据える生徒も増えている。1学年担任の市川成美先生はいう。

「改革を始めた当初は、教師の方から東京大志望へ誘導することがありましたが、11年度の卒業生には1年次から自ら東京大を志望する生徒が何人かいました。中学校時代から

毎年先輩が東京大に合格するのを見て、東京大を身近に感じ、「自分にも出来る」と自信を深めているのだと思います」

### 「個別大学対策講習」で個に応じた指導を徹底

学校の取り組みは、成績最上位層向けだけではなく、中・下位層を含めた、あらゆる学力層に対して実践されている。

その1つが、希望者を対象に、国公私立を問わず志望大に応じた個別指導を行う「個別大学対策講習」だ。特徴は、生徒自らが指導を受ける教師を指名する点で、例えば、国語、世界史、英語が受験科目の生徒は、該当する教師をそれぞれ1人ずつ指名し、指導を受ける。指名できるのは、3年生担当に限らず、中学校も含めた全教師だ。例年、センター試験受験者の9割に当たる100人強が個別大学対策講習を申し込む。

指導の内容は教師に任されている。生徒個々に添削指導をする教師もいれば、複数の生徒を集めて講義形式で過去問の解説を行う教師もいる。いずれにせよ、教師は複数の大学・学部を受験指導を同時に行うため、入試に関する幅広い知識と指導力が求められる。

「個別大学対策講習の期間は、私たち教師にも猛勉強が求められます。指名をしてくれ

た生徒の志望校の入試問題を解いたり、出題の傾向を調べたり、更には小論文の添削や模擬面接も行います。生徒を指導する一方で、実は教師自身のスキルアップに結び付けていることを実感します」（大場先生）

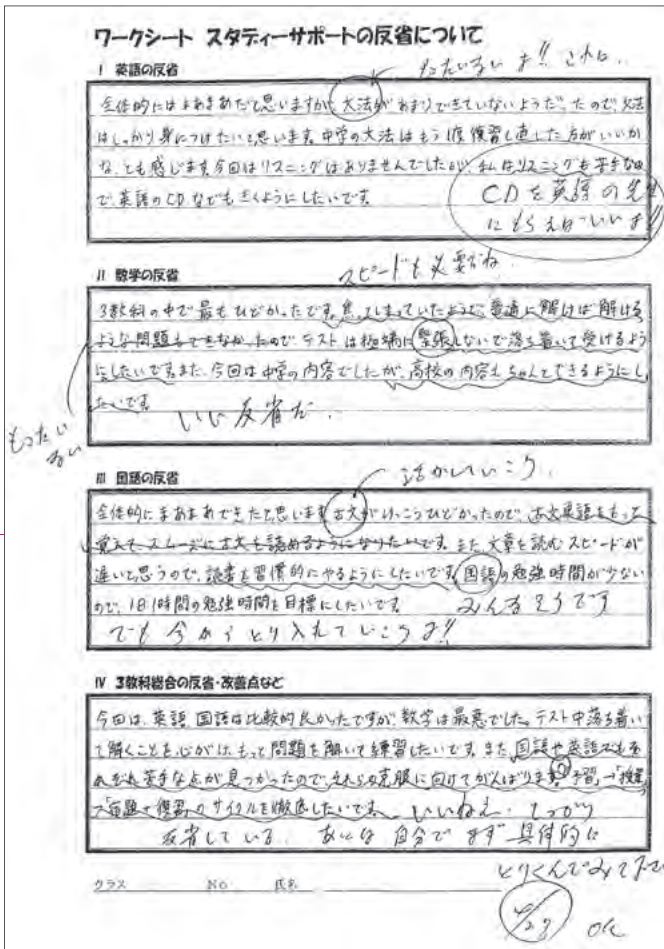
入試本番を控え、生徒が勉強している仲間の姿に刺激を受け、互いに切磋琢磨する雰囲気が生まれるのも、この講習のメリッットの1つだ。

「この時期の生徒は皆、不安と焦りを抱えています。だからこそ、学校に来て、友だちが頑張っている姿を見たり、教師に励まされたりすることが大切なのです。前期日程で不合格だった生徒は、家庭学習では気持ちの切り替えが難しかったと思いますが、学校で受けた周囲の励ましによって、それを乗り越えることが出来たのではないのでしょうか」（市川先生）

### 模試の解き直しと朝学習で中・下位層の学力向上を図る

日々の授業や補習を通して基礎・基本の徹底を図っているのも、同校の大きな特徴である。

中でも重視するのがテストの解き直しだ。定期考査と模試で間違えた問題は全て、「模試直しノート」にもう一度解いて提出する。間違えた問題をまとめてノートに残しておけば、苦手分野の把握や振り返りに役に立つ。更に、ノ



進研模試やスタディーサポート、定期考査は実施後に解き直しをさせるだけでなく、どこが良くどこが悪かったのかを記述させる。言語化によって課題を明確にし、次の試験に向けたステップにするのが狙い  
\*学校資料をそのまま掲載

1トの冊数が増えていけば、自分の努力が目に見える形で分かり、自信にもつながる。  
また、10年前から全校で実施している10分間の朝学習も、基礎・基本の定着には有効だ。1時限目の冒頭から授業に集中して取り組めるよう、朝礼前の10分間を学習の時間としたのが始まりだ。内容は学年によって異なるが、多くが基礎・基本事項の定着を確認するプリントだ。例えば、1年生では国語、数学、英語をローテーションで取り組む。内容は成績中・下位層に焦点を絞り、国語は漢字や古典文法、数学は計算問題、英語は英単語や文法などの定着度を確

認するもので、各教科で作成する。添削は、解答を配って生徒自身に行わせる場合もあれば、回収して学級担任が入念にチェックする場合もある。市川先生は後者である。  
「本当に進みたい大学が決まった時、学力が足りなくて諦めなくてはいけないという思いはさせたくありません。大学の選択肢を広げておくためには、低学年時に基礎・基本を固めておく必要があります。毎朝の課題を負擔に感じる生徒もいると思いますが、今が頑張り時だから確実に基礎・基本を身に付けようと言って励ましています」

## 生徒の主体性をいかに高めるかが今後の課題

改革の成果は、着実に進学実績に表れている。東京大の合格者が毎年出るようになっただけでなく、個別大学対策講習や朝学習などで全体の底上げを図った結果、国公立大や医学部、難関私立大の合格者も確実に増加している。

「以前は、難関大については、成績上位層だけが頑張ればよいという意識の先生方もいました。今は特定のクラスからだけでなく、複数のクラスから東京大を始めとする難関大の合格者が出ており、先生方の間にも自信が芽生えています。今後はこの結果を更に進化させるために、公立の進学校に匹敵する実績を上げ、学校としてもう1ランク上を目指していきたいと思います」(岩崎教頭)

一方、課題と感じているのは、生徒の主体性の向上である。

「本来ならば、『東大講座』や『個別大学対策講習』などで教師が手厚く指導しなくても、生徒が進路実現に向けて自ら努力する力を育てることが必要です。生徒の自主独立の心構えをどのように養っていくか。特に、成績中・下位層を中心に指導を検討しなければならないと考えています」(鈴木教頭)

更なる飛躍を遂げるための同校の改革は、これからが本番だ。

# 30代教師の転

起  
んでも  
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



## 生徒に与えるのではなく 生徒に考えさせる授業を追究

### 私が乗り越えてきたもの

#### 「数学がずっと苦手だった」

数学の苦手意識をいかに払拭するか。28歳で下関南高校に赴任した私は、この課題に直面しました。赴任から1



しながわ・ゆきえ ◎教職歴12年。同校に赴任して9年目。担当教科は数学。2学年担任。  
山口県立下関南高校 ◎全日制／普通科／共学。  
12年度入試では、国公立大は岡山大、広島大、山口大、九州工業大、熊本大、神戸市外大などに計52人が合格。私立大は同志社大、関西大などに延べ152人が合格。

か月ほど経ち、受け持ちのクラスに私になじんでくるにつれ、「中学の時からずっと苦手だった」と打ち明ける生徒が続々と現れたのです。授業ではどの生徒も静かに私の話を聞いてくれていたため、苦手の多さは意外でした。生徒の本音を聞いた私は、分かりやすく説明することに努めました。初出の公式や解法は例題を使ってじっくり解説し、数式が意味することを図で表現するなど、生徒に具体的にイメージ

させるための工夫を重ねたのです。また、復習しやすいノートになるように、板書も整理しました。その結果、次第に「数学が分かるようになった」という生徒が増えていきました。

#### 解法を使いこなせない生徒

受け持つ生徒が変わっても、私は分かりやすく解説することを心掛けました。もっと数学の力を付けてほしいと意気込んだ私は、課題の量を増やし、難易度も上げていきました。課題の解説でも、類題を出しつつ解法を分かりやすく説明することを常に意識しまし

た。こうした指導の末、全国模試で中位層の成績が上昇し、学年全体の底上げにつながりました。

山口県立下関南高校

品川裕紀枝先生

36歳

ところが、上位層は、3年生になって模試の成績が伸び悩みました。答案を見ると、自分の知っている形に持ち込めるように問題文を読み換えたり、複数の解法を組み合わせて解いたりするような、応用力が必要な問題に対応できていないことは明らかでした。ただ丁寧に解説するだけの指導では、一つひとつの解法を身に付けさせることは出来ても、身に付けた解法を自分を使いこなす力までは伸ばせていなかったのです。そのために、志望大の入試に対応できなかった生徒もおり、私は自分の力不足が情けなくなりました。

### 丁寧に教えるだけでは、応用力は伸ばせない

## そして、これからも挑み続ける目標

### 「なぜか」を生徒に問い掛ける

私が自分の指導の課題に直面していた頃、遊びに来た卒業生が私にこう言いました。「2年生までは数学の成績も上がり、やる気もあった。でも、3年生になると気が抜けてしまった」と。考えてみれば、私は、数学を受験科目として使う生徒を増やそうと思うあまり、中位層に狙いを絞った授業をしていました。そのため、上位層の学習意欲を引き出せていなかったのです。

「中位層の学力を伸ばし、上位層の知的好奇心にも応えられる指導をする必要がある」。そう痛感した私は、自分の指導を見直そうと、校内外の先生

の授業を、教科を問わずに見学しました。その中で気付いたのは、どの先生も説明が自分よりずっとシンプルであることです。生徒の表情からは、真剣に考えている様子が見て取れました。

そこで、私の授業でも要点を絞って簡潔に伝えるようにし、生徒への発問を増やしました。以前はただ答えだけを聞いていましたが、そうではなく、なぜその答えになるかを問い掛けることにしたのです。生徒が、返答することを通して、私が簡潔に解説したことへの理解を深めるだろうと考えました。そんな授業に生徒が慣れてきた頃からは、授業スピードを徐々に上げていきました。生徒を受け身にさせないた

め、また、思考のスピードを速くするためです。私の説明にも友だちの答えにも、積極的に耳を傾けてほしいと思いました。授業についてこれない生徒には補習を実施し、以前の私の授業のようにじっくり解説しました。

### 理解しようとする意欲が高まった

授業改善の成果は、徐々に生徒の様子に表れてきました。授業中の質問に、「なぜ、この条件が必要なのですか？」といった、理由を尋ねるものが多くなったのです。公式や解法を覚えるだけでなく、理解しようとする意欲が高まった結果だと思っています。

そうした生徒の意欲を更に伸ばすために、赴任9年目の2012年度は、

## 公式や解法の表す意味を理解させたい

あえて違う分野で学習した解法を使って解説するなど、新たな試みも始めました。「こう問われたら、こう解け」といった解法パターンをただ身に付けるだけでは、応用問題には対応できません。解答を導く方法を自分で考えられるようになってほしい。そんな思いがますます強くなっています。

公式や解法は覚えるだけでなく、それらが表す意味を理解することが大切です。そうすれば、問題に隠されている多くのことに注意を払えるようになり、1つの事柄は多くの事柄につながっている」という複眼的思考力を、数学を通して1人でも多くの生徒が身に付けられるよう、今後も指導を続けていきたいと思っています。

## 品川先生 の 授業実践



## Q&A

**Q** 生徒が暗記に頼った学習をしないように、授業でどのような工夫をしていますか？

**A** 公式は1つずつ丸暗記するのではなく、複数の公式を関連づけて説明するようにしています。例えば、直線は通る1点と傾きが分かれば求められるので、2点を通る直線、曲線の接線もそのことを意識させるようにしています。更に、方程式や不等式などは、グラフと関連づけて、自分が何を求めているのかを視覚から捉えられるようにしています。

また、問題の解説をする時に解答を板書しますが、解答の途中にあえて空白をつくり、そこに何が入るかを生徒に問い掛けている。暗記しただけでは対応できないように、なぜそう考えたのかも必ず説明させます。考える習慣を付けるために、ほぼ毎回の授業で行っています。

**Q** 生徒の考える力を育むために、授業でどのような工夫をしていますか？

**A** 単元・分野を横断する形で、複数の解法を示しています。答えは1つであっても、そこへのアプローチの仕方は複数あることを伝えたいと、今年度から始めました。例えば、ベクトルを学習した時は、教科書の例題を、3通りの解法で解いて見せました。ベクトルの考えを使ったもの、直線の考えを使ったもの、軌跡の考えを使ったものです。複数の解法を知ること、[この問題はこの解法で解く]と覚えるのではなく、[なぜその解法を使うのか]と考え、理解するようになって考えています。また、ベクトル、直線、軌跡それぞれがどういうものなのかを理解する上でも役立つと思っています。

### メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す品川裕紀枝先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、品川先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

[view21\\_since-1975@mail.benesse.co.jp](mailto:view21_since-1975@mail.benesse.co.jp)

# 保護者を「受験生の保護者」にする 2年生冬休みからの働き掛け

## 時期の特徴

少しずつ生徒の受験への意識が高まりつつあるが、具体的な志望大は未定で、入試本番までの過ごし方なども分かっていないため、不安を感じ始める生徒や保護者も多い。

## 指導のポイント

保護者の入試本番までの意識の変化をあらかじめ見通した上で、情報提供の戦略を立てる。また、生徒と保護者が受験について率直に意見交換が出来る関係を築けるよう支援する。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

## 目的別データ活用

### 1 入試本番までに伝えたい内容と時期を整理する

……→ 図1

◎志望大合格に向けて、高校（特にクラス担任）と保護者が足並みをそろえて生徒を支援することが出来れば、生徒にとってこれほど心強いことはない。だが現実には、保護者も入試に対して不安、迷いを抱いている。高校として時期に応じた保護者支援を行うことは、間接的だが重要な生徒支援と言えるだろう。生徒の進路選択や受験に対する意識の変化を踏まえて、いつ、どんな情報・メッセージを、どんな形で保護者に提供するかを、入試まで1年となったこの時期に教師間で確認しておくとういだろう。

### 2 過去の「保護者事例」を共有する

……→ 図1

◎いつ、どんな情報・メッセージを保護者に発信するかは、各校の進路指導スケジュールで決まる。だが、より重要な視点は、自校の保護者のニーズに合致しているかどうかであろう。保護者との関係構築が難しくなっていると言われる昨今、それぞれの教師が過去に体験した保護者とのかわりを教師間で共有しながら、「この時期に、こうした内容を伝えることで、保護者からどんな質問が上がるかが予想されるか」などを話し合っておく。そうして保護者を深く理解して支援することで、保護者との信頼関係を深めていくことが出来る。

## 対教師へのデータ

保護者に理解してほしい内容、時期を教師間で目線合わせする

## データを用いた指導の流れ

### STEP 1

◎2年生の冬休み（後半）から、受験本番までに、保護者に理解しておいてほしい情報、学校として伝えたい思いを挙げる（図1）

### STEP 2

◎STEP 1で挙げた内容について、それぞれ、発信するツールや機会を検討する（図1）

### STEP 3

◎保護者に情報発信を行う前に、そうした情報に対して保護者からどんな反応や質問があったか、過去の事例を学年団などで共有する（図1）

### STEP 4

◎3年生の学年団に図1の内容を申し送りし、伝えたこと、まだ伝えていないことを確認してもらう

図1 保護者に伝える内容と時期の整理シート

保護者に伝える内容	時期	伝える手段	過去に保護者から出た質問を共有しましょう
<p>●現時点の志望の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校と生徒が共有した学習プランを保護者に示す</li> <li>3年生・0学期の学校での取り組みを説明する</li> <li>基本的な入試情報や進学環境の資料を配る</li> <li>冬休みに、保護者と生徒の間で志望大に関するすりあわせを行うようお願いする</li> </ul>	2年生 12月	三者面談	わざわざ都市部の大学に行くよりも、地元の専門学校に進学したほうが、進学費用がかからず、就職にも有利だと思うのだが
<p>●1年後の大学入試本番までの流れ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>現役生の成績推移モデルを例示する</li> <li>センター試験、個別学力試験などの出願時期と、それまでに決めなければならないことを整理する</li> <li>現3年生の自己採点結果を例に、日々の授業の重要性を説く</li> </ul>	2年生 1月	学年通信	子どもの今の校内順位であれば、どの大学までがターゲットになるのか、過去の合格状況を教えてほしい
<p>●模試帳票の見方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>得意・苦手分野を見極めて、今後に生かす方法</li> <li>合格可能性判定とは何か</li> <li>学校が指導している模試を活用した学習の概要</li> </ul>	2年生 2月	学年通信 ※1月模試の結果を用いて	D判定では合格の可能性がないと思う。浪人はさせたくないから、志望校を変更させたいのだが
<p>●家庭学習の重要性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校が提示する春休みの学習計画の概要</li> <li>望ましい春休み中の生活スタイル</li> <li>課題点検日、補習実施日を改めて告知</li> </ul>	2年生 3月	学年通信	いくら言っても家では勉強しない。塾に通わせれば少しは勉強するようになるのではないかと思うのだが
<p>●受験生の保護者として必要な視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>入試までの1年間のスケジュール（国公立大・私立大別に説明）</li> <li>「受験生」としての意識変化</li> <li>部活動との両立、引退後の学習計画</li> <li>受験は団体戦（クラスの大切さ）</li> </ul>	3年生 4月	個人面談時に保護者向け資料を生徒に配布	奨学金にはどのような種類があるのか AO入試とは何か。うちの子どもでも受験できるのか
<p>●学年団としての戦略と、担任の熱意</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進路志望調査の意味を説明し、協力をお願いする</li> <li>3点固定の重要性、保護者のサポートの重要性</li> <li>担任が目指すクラス像（日々の指導の具体例を挙げながら）</li> </ul>	3年生 5月	保護者会	部活動に一生懸命なのはよいことだと思うが、6月までこの調子で本当に大丈夫なのか



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け） > 生徒指導・進路指導ツール集

## 現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

### 情報の理解と当事者としての納得は異なる

学年通信などを通じて、入試情報を保護者に届ける機会が多いだろう。もちろんこうした働き掛けで保護者の入試に対する知識や心構えはある程度は養われる。だが、伝わっていても、我が子の問題として納得できているとは限らない。家庭内で実際に子どもとどのようなコミュニケーションが取られているか、三者面談などで保護者の意識を確認したい。

### 学資ローンや奨学金情報は出来るだけ早めに伝える

大学進学には、経済的な後ろ立ても欠かせない。受験料のほかにも、入学金、授業料、更に入学後の生活費も必要だ。長引く不況の中、経済的な理由から、進学するかどうかを悩まざるを得ない家庭もある。奨学金などをうまく活用すれば、自己資金が少なくても大学進学は可能だ。保護者と生徒が見通しを立て、進学を決意できるよう、早めに検討材料を提供したい。

### 進学環境の概要を理解できる情報源を提示

最近の保護者の入試に関する知識量は二極化している。保護者対応では、一定の知識を持った保護者の誤解を解くことが大きなテーマになりがちだが、そもそも入試に知識も関心も持っていない保護者に基本的な情報を提示することも重要になる。保護者向けに入試情報をまとめたWebサイトを紹介するなど、全体像を俯瞰できる情報源を提示したい。

## 目的別データ活用

### 1 進路に対する考えを家庭内で伝え合ってもらおう

……→ 図2

◎2年生の冬休みは、保護者と子どもが進路についてゆっくり語り合い、共に考えることが出来る絶好の機会である。3年生になると長期休業中は受験勉強一色で、コミュニケーションを十分に取る時間的な余裕が少なくなる。入試本番が1年後になるこの時期は、普段あまりコミュニケーションを取らなかったり、これまで進路について十分に話し合っていなかったりする家庭に語り合ってもらおうチャンスとなる。なぜ大学に行くのか、そこでどのようなことをしたいのかなど、進路選択の本質部分について双方の考えを出し合えるよう、高校がガイド役を果たしたい。

### 2 受験生の保護者として求める姿勢を明確にする

……→ 図3

◎家庭内でのコミュニケーションを促す際には、保護者が子どもと向き合う際の望ましい姿勢、注意点についても併せて伝えておきたい。保護者の希望を一方的に押し付けたり、醸成途中の子どもの思いを軽視したりすることを防ぐためだ。ただ、ほとんどの保護者は「自分は子どもの言葉に耳を傾けている」と思っているものだ。頭では「受験生の保護者として望ましい態度」は分かっているけれども、実際にそれが出来ているのか、保護者が普段の行動と照らし合わせながら自己診断できる機会を提供したい。

対保護者  
への  
データ

保護者が子ども  
の思いに耳を傾け、  
コミュニケーション  
を取る土台をつくる

## データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎生徒に図2のシートを配り、冬休み中に保護者と進路について話し合う時間を取るよう伝える	◎保護者にシートを介して子どもと話をしてほしい旨を伝える。また、図3を渡して、コミュニケーションを取る際の注意点を伝える	◎生徒、担任、保護者、担任の順番でシートをリレーしていく(図2)	◎各家庭で記入されたシートでコミュニケーションの深まり度合いを確認し、今後の指導に生かす(図2)

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

●2007年12月号「2年生を受験生にする『3年0学期』の意識付け」

●2008年6月号「受験へ向けた3年生保護者への意識付け」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>

生きたデータの徹底活用  クリック!

HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→  
生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料が  
ダウンロードできます!

生徒指導・  
進路指導  
ツール集

ウェブサイトで  
ダウンロード!

図2 進学に対する生徒と保護者の考え交流シート

( ) 年 ( ) 組 名前: ( )

	生徒の思い	担任コメント	保護者の思い	担任よりご家族へ
何のための大学進学か？ どんな大学に進学したいか			(保護者としての希望)	
大学生活で力を入れたいこと			(保護者としての希望)	
大学卒業後の夢、希望				
3年生をどのように過ごしたいか				

●進路についての生徒の考えに担任がコメントを補うことで、生徒の言葉不足による保護者の誤解を防いだり、生徒の希望を後押ししたり出来る。また、保護者の言葉を受け、最後に担任が思いを語ることで、保護者と生徒双方がシートについて改めて関心を持つことができ、コミュニケーションの材料としての価値が高まる

図3 「受験生の保護者」の姿勢チェックシート

チェック	解説	例えばこんな言葉を発していませんか？
お子様の考えにも、耳を傾けていらっしゃいますか？	インターネットの急速な普及などからも分かるように、社会は速いスピードで変化しており、保護者の方々の体験や知識が通じない場面も出てきています。自分の意見は今も正しいのか？ 別の見方があるのでは？ など1歩引いてみて、お子様に聞いてみることも大切ではないでしょうか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●○○学部なんかに進学しても就職先はない (○○学部に行けば就職は心配ない)</li> <li>●○○大学は、自分が高校生の頃は人気じゃなかった</li> <li>●○○大学は資格試験の合格者が多いからお勧めだ ※もしかすると、受験者数が多いだけで、合格率は低いかもしれません！</li> </ul>
今の成績だけで合格可能な大学を考慮しておられますか？	2年生の3学期からの頑張りで、3年生の夏から秋にかけて、成績がグンと伸びる受験生はたくさんいます。また、今はまだ成果は出ていなくても、お子様は十分に努力をしているのかもしれない。今の成績だけで志望大を決めるのは早計です。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●どうせ○○大学なんて無理に決まっている</li> <li>●○○大学に行くなら、浪人しないよ (もちろん浪人なんてさせられない！)</li> <li>●○○大学に合格したいなら、もっと何倍も勉強しないと</li> </ul>
大学卒業後を見通してアドバイスをされていますか？	大学さえ卒業すれば何とかなる時代、大学名だけで幸せな一生が送れる時代ではなくなりました。4年間強い興味を持って、人生の土台づくりとして学び続けることが出来る大学や学部をお子様は選んでいるか、ぜひ一緒に考えてあげてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●とにかく○○大学より偏差値が上の大学じゃないといけな</li> <li>●○○大学さえ出れば何とかなる</li> </ul>
勉強以外のことも、お子様と語り合っていますか？	2年生から3年生にかけては部活動や学校行事も忙しく、思うように学習時間を確保できない場合もあります。しかし、最高学年として部活動や行事に打ち込み、学校全体を引っ張っていく経験は、必ずお子様の将来の糧となります。お子様がどんなふうに頑張っているかを聞き、ぜひ褒めてあげてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>●部活動ばかりに一生懸命になっていいの？</li> <li>●学校行事に夢中になっているけど、余裕あるのね</li> <li>●近所の○○さんは、部活動を引退して、塾に行き始めたらいいよ</li> </ul>

お子様にも保護者にも、「受験」に向けて求められる姿勢は同じです。お子様の姿勢をぜひチェックしてみてください！



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ (高校向け) > 生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス (プラスαの指導)

「友だち親子」のコミュニケーションに注意

最近、生徒と友だち同士のようにいろいろな話をしている保護者も多い。しかし、そうした家庭が進路についてもコミュニケーションできていると判断するのは尚早だ。進路についての話題はなかったり、保護者が話す割合の方が高かったりする場合もあるからだ。各家庭で、子どもと保護者双方がバランスよく思いを明らかにしているかを上記シートや面談などで確認したい。

「3年生」としての大切さも生徒・保護者に理解してもらう

3年生は、授業、行事、部活動など、さまざまな場面で、これまで積み重ねてきた経験の集大成となる時期だ。友人たちと切磋琢磨して過ごす時間は、入試のみならず、これからの将来においても必ず生徒の力になる。3年生を単なる受験準備学年にするのではなく、学校を軸にした生活を送ることの価値を伝え、3年生としての生活の過ごし方も家庭内で話し合ってもらいたい。

大学進学の意味も保護者に考えてもらう

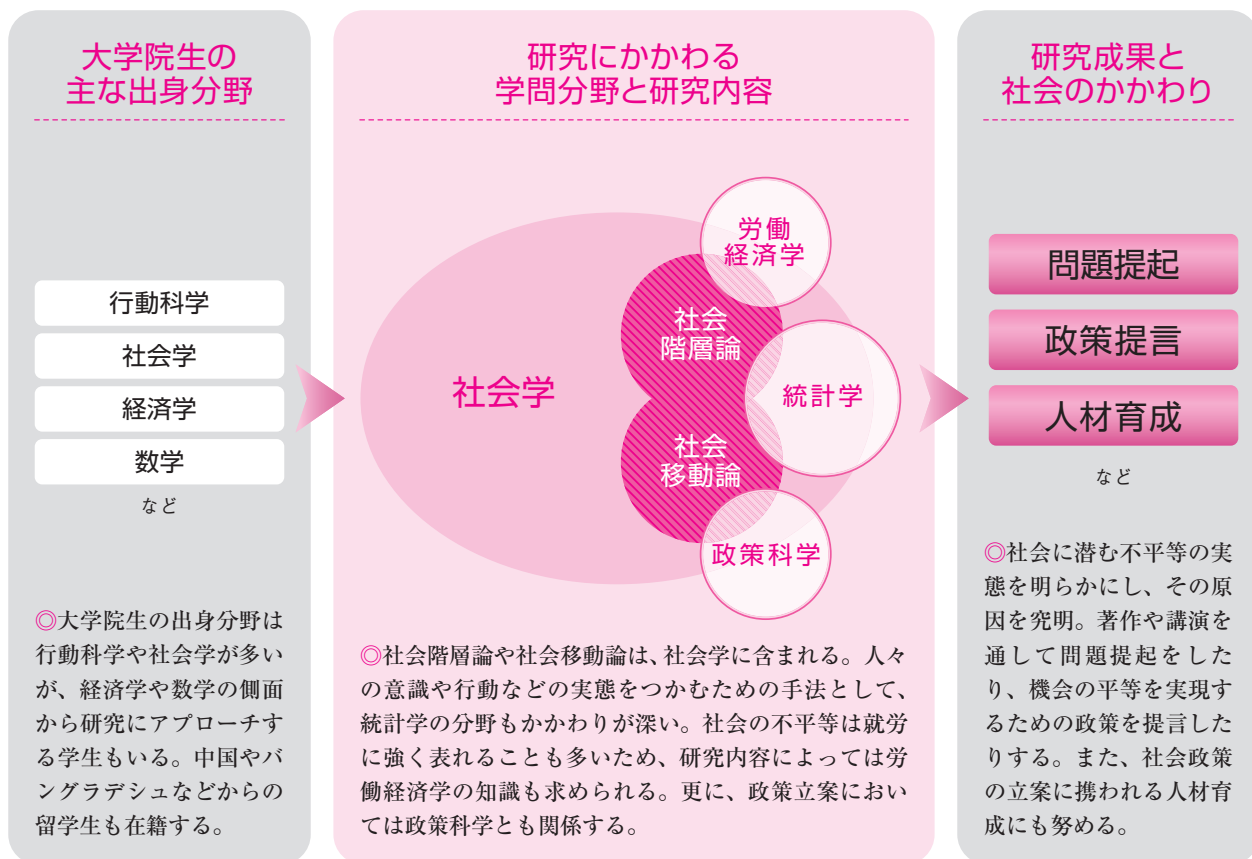
大学進学率は5割に達しているが、それでも「少しでも早く社会に出た方が有利」「女の子には大学進学は不要」など、子どもの進路を古い価値観で決める保護者は今も存在する。そうした保護者には、現代を生きる我が子にとって、大学進学がどのような意味を持つのかを考えてもらうことが必要だ。学校から生涯賃金や就職先の選択肢などについて伝え、家庭での話し合いを促したい。

# 「不平等」の要因を解明し 皆が平等に暮らせる社会を目指す

東北大大学院 文学研究科 行動科学研究室

社会には、1人の力では解決することが出来ないさまざまな「不平等」が存在する。社会階層論・社会移動論は、社会の階層構造を解明し、その中に潜む不平等をなくすための政策を提言する学問だ。数ある研究テーマの中で、現代の日本における大きな社会問題である正規雇用・非正規雇用の格差問題を中心に研究し、グローバルCOE「社会階層と不平等教育研究拠点」拠点リーダーを務める佐藤嘉倫教授に、全ての人が平等に暮らせる社会の展望を聞いた。

## フローチャートで分かる行動科学研究室



## 目の前の「不平等」に気付くことから始まる

社会階層論・社会移動論が求める学生像

発想や思考を柔軟に切り替える力

社会や人間に対する好奇心や探究心

問題を追究する集中力と継続力

私たちの研究対象は、今、私たちが生きている社会やそこで生活している人々です。それゆえに対象化が難しく、ある不平等があったとしても、「当たり前のこと」として見過ごしてしまいがちです。しかし、例えば「外国や日本の過去と比べてどうなのだろうか」などと発想を切り替えて見ることが出来ると、今の社会の問題点が浮かび上がってきます。

研究テーマは、「なぜだろう」といった小さな疑問が出発点になります。そのため、社会や人間に対する強い好奇心を持つ人が、この分野の研究者に向いていると言えます。

1つのテーマの研究に長期間取り組むこともよくありますから、集中力や継続力も大切な資質です。根気強さも必要でしょう。地道な調査を続けていると、途中でくじけそうになることもあります。研究の原動力になるのは、何よりも目の前の謎を追究したいという探究心なのです。

### 高校生へのメッセージ

高校時代から論理的思考力とコミュニケーション能力を磨いておく、将来、とても役立つでしょう。数学の証明問題などは「何の役に立つのだろうか」という疑問を持つ人もいるかもしれませんが、仮定から結論へと論理的に導く訓練をしておくことで、相手に筋道を立てて説明できるようになります。また、仕事は人とかわりながら進めるものですから、コミュニケーション能力も大切です。日本語はもちろん、英語でのコミュニケーション能力も意識して学習すると良いと思います。



佐藤嘉倫 教授

さとう よしみち 東北大学院文学研究科教授。グローバルCOE「社会階層と不平等教育研究拠点」拠点リーダー。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。横浜市立大商学部助教、シカゴ大学社会学部・コーネル大学社会学部客員研究員を経て、現職。専門は社会階層論、合理的選択理論など。主な著書に「ゲーム理論 人間と社会の複雑な関係を解く」(新曜社)などがある。

## 研究のきっかけ 貧富の差を 目の当たりにし 社会構造に関心

私は東京の下町に生まれ育ちました。周辺には町工場や商店などを営む家庭が多くあり、比較的貧しい地域でした。子ども

の頃からそうした環境で育ちましたので、社会の状況や構造に何も疑問を持たずに、中学・高校時代を過ごしました。ところが、大学に入って出身地がさまざまな同級生と接しているうちに、自分が思う以上に日本は貧富の差が大きいことを知りました。キャンパスの近くの高級住宅街を初めて歩いた時も、「ここが本当に同じ日本なのか！」と驚いたものです。

大学では数学を学ぶつもりでしたが、入学後、数学が本当に得意な同級生を見ているうちに、自分には数学の才能がないと感じるようになりました。その一方で、貧富の差の存在を目の当たりにし、社会の不平等を実感した経験から、次第に日本社会のあり方について関心が高まってきました。幸い、3年生で理科系から文科系の学部に進学できる制度

があったため、思い切って文転し、本格的に社会学を学び始めたのです。

私が専攻したのは、社会学の中でも社会階層論、社会移動論と呼ばれる分野です。社会階層論では、世の中がどのような階層で成り立っているのかを研究します。例えば、資本主義社会には、資本家と労働者、ホワイトカラーとブルーカラー、高所得者と低所得者などの区分があります。社会移動論は社会階層論と密接した分野で、階層間の移動の状況を研究します。例えば、ある階層の親を持つ子どもが別の階層に移動できるのか、出来る場合はどのようなケースなのかなどを研究します。

### 研究概要

## 非正規雇用者が 受ける不利益を 拭い去るために

社会階層論・社会移動論で使われる代表的な研究方法は、サンプリング調査です。日本全国から無作為に調査対象者を抽出し、調査員が職業や年収、学歴、親の職業などを質問します。そうして数千人のデータを集めて統計分析を行い、研究結果としてまとめていきます。

現在、私が特に関心を持って取り組んでいるテーマは、正規雇用・非正規雇用の問題です。学校を卒業して初めて就いた職業が正規雇用か非正規雇用かによって、収入や雇用の安定性、社会保障、福利厚生などに大きな格差があり、その後の生活や人生に大きな影響が出てきます。更に、いったん非正規で雇用されると、なかなか正規雇用に移れないこともよく知られています。それらは、私たちの調査結果によっても裏付けられています。

ここで1つの疑問が生じます。なぜ、正規雇用者と非正規雇用者にはそれほど差があるのか。これは、決して「当たり前」のことではありません。諸外国と比べると、非正規雇用者の賃金は、日本では正規雇用者の5割程度ですが、オランダでは8割を上回ります。他のヨーロッパの国々でも、日本のような低水準にある国は見当たりません。日本と諸外国とで違いが生じるのはなぜなのか。その原因を究明するのが私たちの研究です。

これまでの研究で分かってきたことは、非正規雇用者が現実と制度の

狭間に落ちてしまっているという現状です。日本では、高度経済成長、更にはバブル経済の頃までは、各種の社会制度は正規雇用者を対象として整えられてきました。経済情勢が変化して非正規雇用者が増えてきたにもかかわらず、それらの制度は基本的には変わっていないため、さまざまな不利益が非正規雇用の人々にもたらされているのです。

## 研究の展望

### 日本の社会に命をかけるのが使命 機会の平等を実現する

研究の面白さ

の1つは、謎を解明するプロセスにあります。

例えば、正規雇用・非正規雇用の問題であれば、非正規雇用

者の収入が低い理由について、「学歴が低く、職務経験も積んでいない傾向があるからだ」と説明されることがあります。しかし、日本とオランダの非正規雇用者の間に、学歴や学歴などの面で大きな差があるとは思えません。そこには別の要因があるはずで、それが何であるかを研究によって明らかにし、社会に対して問題提起や政策提言を行うのです。

私たちが目指しているのは不平等を拭い去ることですが、不平等には2つの側面があります。

職業によって収入に差があるのは、「結果の不平等」です。これがあまりに広がると社会は不安定になりますが、完全に平等であると、誰も頑張ろうという気持ちが起こりません。ある程度、結果の不平等があることが社会的には望ましいと考えられています。

一方、現代の日本には、例えば、医者になりたい場合、保護者が医者である方が有利という現状があります。背景には収入、教育、文化などさまざまな要因がありますが、出身階層によって挑戦する機会が制限されているとすれば、それは「機会の不平等」と言えます。正規雇用・非正規雇用の問題も、この機会の不平等が1つの原因となって生じている可能性があります。

平等な社会をつくり上げるために、機会の不平等があることは望ましくありません。社会階層論・社会移動論の最大の使命は、機会の平等を実現する、その一言に尽きるところです。

## 用語解説

### 1 ホワイトカラーとブルーカラー

ホワイトカラーは、一般に頭脳労働の従事者を指す。白いワイシャツを着用して仕事をする職種が多いため、こう呼ばれるようになった。一方、ブルーカラーは作業員など、主に肉体労働の従事者を指す。作業服の色に青系が多いため、こう呼ばれるようになった。

### 2 正規雇用・非正規雇用

一般に、フルタイムで従業員期間を定めない雇用形態を正規雇用という。一方、契約社員や派遣社員、アルバイト、パートタイマーなど、従業員期間や就業時間が定められている雇用形態を非正規雇用という。近年、非正規雇用の割合が増えているが、収入が少ない、雇用が不安定、キャリアアップの機会に乏しい、福利厚生が不十分などの課題が指摘されている。

### 3 高度経済成長

経済が飛躍的に成長することを指す。日本では、1950年代半ばから1970年代半ばにかけて高度経済成長を迎えた。

### 4 バブル経済

実態経済の経済成長を超えて、株式や不動産の価値が高騰する経済状態を指す。日本経済は、1986年から1991年までバブル景気を経験した。

### 5 DV

ドメスティック・バイオレンス (domestic violence) の略称。家庭内暴力の意味。

# 離婚が子どもにもたらすさまざまな影響を研究

余田翔平さん

よだ・しょうへい 東北大学大学院文学研究科行動科学研究室博士後期課程3年。神奈川県・私立サレジオ学院中学・高校卒業



**Q** なぜこの分野に進んだのですか

**A** 高校時代は将来の道が定まらず、正直に言って何となく

東京都立大（現首都大東京）に進みました。当時は2年生進級時に学科を決める制度だったため、1年生で幅広い科目を学び、自分に向いているような学問を探しました。その中で興味を持ったのが社会福祉学です。児童虐待やDVといった問題の現状に衝撃を受け、もっと勉強してみたいという気持ちで社会福祉学科に進

みました。

卒論は、親の離婚が子どもの発達や人生にどのような影響を与えるかをテーマにしました。卒業後に就職するかどうか迷いましたが、このテーマをもっと掘り下げたいと考え、大学院に進むことにしました。

**Q** 現在の研究内容を教えてください

**A** 現在、3つの研究を同時進行させていますが、グローバルCOEとして研究しているテーマは、卒論と同じ、親の離婚が子どもに与える影響についてです。

子どもにとって、親の離婚はコントロールが出来ないことであり、発達やライフコースなど、人生に少なからず影響を及ぼします。これまでのさまざまな研究により、例えば、学歴や就職の面で不利になりやすいことが分かっています。親が1人になるために家計が苦しくなり、進学が厳しくなるといった影響が推測されますが、母子家庭・父子家庭では、収入が一般世帯と同水準であっても、同じ問題が起こりやすいことが分かっています。その要因を探るのが、現在の研究テーマです。

研究では、仮説を立てた上で大勢

の人を対象にした統計調査をし、集めた膨大なデータを分析して、仮説の検証をします。その際、統計学が必須となるのですが、私は高校時代、数学が非常に苦手でした。研究を始めたばかりの頃は苦手意識でいっぱいでしたが、研究のために学ぶうちに受け入れられるようになり、今では面白いとさえ思うようになりました。高校時代は「これが何の役に立つのだろうか」と、いわば「数学のための数学」という思いで勉強していました。統計学は自分の主張の根拠を客観的に示すツールとして、今は欠かせないものとなっています。ツールとしての数学の有用性を実感できたことが、私を数学嫌いから解

き放ってくれたのだと思います。

また、時折、仮説と異なる結果が出ることもあります。しかし、それは失敗ではなく、直感に反する新事実が明らかになることにもつながる、研究の醍醐味でもあるのです。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 私自身がそうでしたが、高校時代にやりたいことが決まっていなくても、慌てる必要はないと思います。大学入ると幅広い分野の授業を受けられるため、徐々に将来の道が見えてくるでしょう。ただし、そのためには、文系・理系にかかわらず、高校ではどの授業もきちんと受け、自分の可能性を狭めないことが大事だと思います。

## 私の高校時代

### 研究に役立っている 苦手だった英語

●高校時代は、部活動のバスケットボールに熱中しました。中学時代に始めて6年間続け、途中で諦めずにこつこつ頑張る姿勢が身に付きました。これは地道で根気強い研究が求められる今に生きています。また、部長を務めたことで、小さな組織であっても人をまとめる難しさを経験できました。

もう1つ、今、高校時代に頑張っておいてよかったと思うのは、英語の勉強です。私は中高一貫校に通っていたので、6年間、同じ英語の先生から学びました。その先生はとても厳しく、当時は英語の授業が嫌でたまりませんでした。が、叱られたくない一心から一生懸命勉強しました。研究者となった今、毎日のように英語の論文を読むようになり、高校時代に身に付けた英語が役立っています。

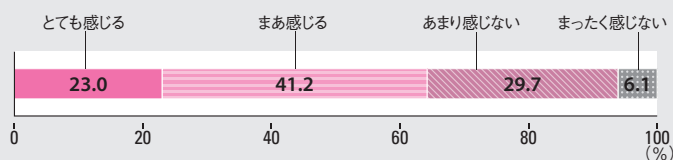
高校時代に学んだ知識は後々役立つので、どの科目も一生懸命取り組んでほしいと思います。

# 新課程がもたらす 学力差の広がりに どう対応すべきか

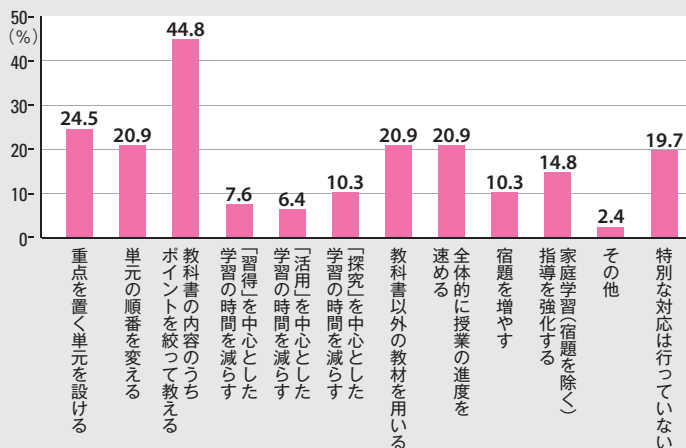
Benesse教育研究開発センターの調査によると、高校に先駆けて新課程が全面実施となった中学校では、多くの教師が新課程の実施によって生徒の学力差の広がりを感じている。中学校までの学習内容の積み残しが増えると考えられる高校では、どのように対応しようとしているのか。岩手県立盛岡北高校の取り組みを紹介する。

図1 新課程全面実施後の変化（中学校）

Q. 新課程全面実施後、昨年度（2011年度）と比べて、生徒間の学力差による授業のやりにくさを感じますか



Q. 新課程全面実施後、授業を計画通りに進めるために、現在行っている対応はありますか（複数回答）



\* 調査対象は中学校教員361人（有効回答数330人）、WEBにて実施  
出典/Benesse教育研究開発センター「中学新課程影響に関する調査」（2012年6月）

中学校教師の多くが  
学力差の広がりを感じている

ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、2012年度から新課程が全面実施された中学校では、6割以上の教師が、以前に比べて、生徒の学力差により授業をやりにくいと感じているようだと（図1）。また、増加した学習内容を計画通りに進めるために、「教科

書の内容のうちポイントを絞って教える」「重点を置く単元を設ける」などの対応を取る教師が多かった（図1）。  
こうした生徒の変化と中学校での指導の変化を踏まえ、高校では入学段階での丁寧な生徒把握に基づいた指導がより求められているが、そうした取り組みを行っている岩手県立盛岡北高校の事例を次ページから紹介する。

岩手県立盛岡北高校

# 1年次に模試と意識調査を継続して行い生徒個々の課題を早めに把握して対応

## 入学直後のオリエン合宿で高校生としての二歩を踏み出す

中学校の新課程は2009年度から数学と理科が先行実施され、その中で3年間学習してきた生徒が、12年度に高校1年生となった。これまでの1年生とどのような違いがあるのか。進路指導課の小田島淑人先生は次のように指摘する。

「今までに比べて数学の学力が高くなったと感じる一方で、国語や英語の力には不安があります。特に、読解問題や記述問題が苦手なようです」

生徒の学力差について、進路指

導主事の千葉貢先生は次のような懸念を話す。

「全ての教科を新課程で学んだ生徒が入学してくれば、学力差は更に広がると予測しています。学習量の増加などにより、中学校で授業に付いていけなくなる生徒が増え、その結果、学力の二極化が進み、中位層が少なくなるような状況が強まるかもしれません」

このような変化に対し、同校は、生徒が教師に傾倒できる相互関係を意味する「師弟和熟」の教育目標に則り、生徒と教師が近い距離を保ち、一人ひとりを手厚く支える指導で対応する考えだ。

まず、高校に早くなじみ、安定

した生活が送れるよう、入学式の翌日から1泊2日のオリエンテーション合宿を実施する。テーマは「仲間づくり」。教科学習ではなく、人間関係の構築を目的とした共同作業を行う。

「全ての生徒が高校生活の最初の一歩をうまく踏み出せるようにするのが狙いです」（千葉先生）

近年、広い地域から志願者が増え、1つの中学校からの入学生が数人ということもあり、生徒が学校になかなかなじみず、不登校につながることもあった。合宿を始めてからは、生徒同士が打ち解けるまでの時間が早くなり、不登校者は大幅に減ったという。



岩手県立盛岡北高校  
千葉貢  
ちば・みつぐ  
教職歴28年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。



岩手県立盛岡北高校  
高橋直文  
たかはし・なおふみ  
教職歴26年。同校に赴任して3年目。進路指導課、2学年主任。



岩手県立盛岡北高校  
小田島淑人  
おだしま・よしこ  
教職歴22年。同校に赴任して4年目。進路指導課、1学年主任。



岩手県立盛岡北高校  
梨子田 喬  
なした・たかし  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。進路指導課、2学年担任。

### 岩手県立盛岡北高校

◎教育目標は、「生徒と教師がともに学び、共に切磋琢磨する『師弟和熟』の精神で、勉学に励み、心身を鍛える『青春道場』」。

◎全日制／普通科／共学 ◎1学年約240人

◎2012年度入試の合格実績（現浪計）／国立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、山形大などに139人が合格。私立大は、盛岡大、東北学院大、東北福祉大、東北工業大、学習院大、日本大、明治学院大などに延べ168人が合格。

### 意識調査で生徒の内面にも迫り課題には素早く対応

同校が生徒一人ひとりを丁寧に指導するために活用するのは、1

図2 「スタディーサポート検討会」の資料（抜粋）

氏名	校内順位			1年7月模試 (偏差値)				スタサポ 1-2学力(GTZ)				国語の学習 上の悩み	数学の学習 上の悩み	英語の学習 上の悩み	平日の 学習時間	休日の 学習時間	部活動と学 習の両立	現在の気持ち や状況	高校生活 の振り返り (10点満 点)	文理選択に ついての決 定状況	文理選択を決 める上で重視したい こと
	55 11	1年7 月	55 12	国語	英	数	理	国語 英GTZ	国	数	英										
	4	156	99	47.5	51.9	50	42.7	B2	C2	B3	A3	学習の方法が わからない	今のところ悩 みはない	今のところ悩 みはない	ほとんど しない	ほとんど しない	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中で きない	頑張って今 の成績を伸ば したい	5点	理系に決定	学びたい学 科や職業に 近づける方 を選びたい
	236	231	236	41.3	40.4	47.1	38.8	D2	C1	D2	D2	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	計画を実行 できない、ま たは長続き しない	1時間	3時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中 できない	勉強したい が、しかた なく勉強し ていない	6点	考えている が決定でき ていない	いろいろな 方向に進め る方を選び たい
	41	7	225	58	63.5	60.4	40.4	C2	C1	C1	C4	学習に集中 できない	学習に集中 できない	学習に集中 できない	ほとんど しない	1時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中 できない	勉強が興味 に思えず、 やる気がな れない	6点	文系に一 定決心して いる	いろいろな 方向に進め る方を選び たい
	174	182	180	45.8	45.8	45.1	49.4	B3	B3	B2	C2	学習の方法が わからない	授業の進め 方について悩 みがある	英語の勉強 について悩 みがある	30分	3時間	部活動で疲 れ、自宅での 学習に集中 できない	勉強はしたい が、しかた なく	5点	理系に一 定決心して いる	学びたい学 科や職業に 近づける方 を選びたい

黒色が要注意、灰色は注意を意味する内容。

\*学校資料を、項目を抜粋して掲載

年生で2回行うスタディーサポートだ。1年生4月の実施分では、進路希望や保護者との関係など、進路・生活面を主に確認し、その資料を使って5月の連休明けに二者面談を行う。次に、「1年間で学習意欲や学習時間が最も下がりやすい時期」（千葉先生）である9月に実施し、生徒の変化を追う。10月には学年団と進路指導課で「スタディーサポート検討会」を開く。用いる資料はスタディーサポート2回分と進研模試の成績、設問の回答を表計算ソフトで一覧表にしたもので、成績が低い箇所と、「学習の方法が分からない」「授業の進度についていけない」など、課題のある箇所のセルに色を付ける（図2）。このような資料を作る理由を、進路指導課の高橋直文先生は次のように説明する。

「課題のある箇所に色を付けることで、生徒が抱えるさまざまな課題が一目瞭然になり、タイムリーに指導に生かれます。学力だけでなく、生徒の内面にまで迫れるのが、この資料の良いところです。色の数が多い生徒とはすぐに面談をするようにしています」

データは学年団で共有して話し合うため、教科担任から学級担任に、「この間の授業でこんなことがあった」といった情報もたらされることも多い。また、養護教諭も参加し、保健室での様子を伝えることもある。

「学級担任が課題のある生徒を1人で抱え込まないような体制にしています。学級担任だけで対応できない時には、学年主任を交えた面談をするなど、手厚く生徒を支えられます」（千葉先生）

生徒は、複数の教師に同じことを褒められたり、注意されたりすることに慣れる。それが「いつも先生たちに見守られている」という安心感につながっている。

「新課程の全面实施によって学力差が広がった場合、このような生徒の内面まで掘り下げた理解をした上での支援がますます重要になると考えています」（千葉先生）

**下位層に手を掛けることが中位層の引き上げにも有効**

学習指導では、生徒個々の支援に力を入れる。まず、家庭学習習慣の定着のために、1年次から毎日、家庭学習ノートを提出させ、担任がチェックしている。進路指導課の梨子田喬先生はこう話す。

「家庭学習は積み重ねが大事だ」という意識を持たせるために、学習時間も記入させ、学習量を把握できるようにしています。また、ノートには『学校に行きたくない』『部活を辞めたい』といった悩みを書く生徒もいます。担任が毎日見ること、事前に問題を防ぐ役割もあります」

学力層別の指導も始め、特に成績下位層の支援を重視する。

「下位層の生徒に接する上で大切なのは、『自分たちは手を掛けられている』と感じさせることです。教師に見放されていると思うと、生徒は学習から離れ、ひいてはクラス全体の学びに向かう姿勢が崩れてしまいます。下位層の頑張りを見ることで、少し上の層の生徒も刺激され、学習に向かうようになり、それが、学校全体の底上げにつながります」（千葉先生）

下位層の指導では、予習・復習や週末課題の取り組み状況を教科担任が厳しくチェックし、未着手や未提出の生徒は放課後に残して取り組ませたり、再提出させたりしている。理解が遅れている生徒には、例えば英文を10回ずつ書かせてレポートを提出すれば合格というような、比較的簡単な内容を課すこともある。そうしたスモールステップを重ねるうちに次第に力が付くという。

中位層は授業に付いてこられる生徒が多いため、学習意欲が下がらないように心掛ける。

「面談などを通して『常に自分は見られている』という意識を持たせることが大切です。そのようにして学習意欲を高められれば、次第に上位に食い込んでこられる層でもあるからです」（千葉先生）

上位層には、志望大別の添削指導を行うなど、意識を更に高める指導に力を入れる。

「添削指導の開始時期は志望大の難易度に応じて変えています。難関大を目指す生徒は早い段階でグループ分けをし、添削指導を始

めます。同じ目標を持つ生徒が集まり指導を受けることによって仲間意識が強まり、長い受験勉強を精神的に持ちこたえられるようにするのが狙いです」（千葉先生）

### 上位層も下位層も 学ぶ場のある協同学習

上位層・下位層共に有効な学習活動として力を入れるのが、少人数のグループ学習だ。現在は、2年生の英語と小論文で実施。3クラス合同で行う英語のタスク達成型グループ学習は、エッセーライティングや暗唱といったタスクに4人1組のグループで取り組む。上位層の生徒は他の生徒に説明することで理解が深まり、友だちに教えてもらった下位層の生徒は頑張ろうと意欲が高まる効果がある。

小論文は、以前は「総合的な学習の時間」に教師が指導していたが、後述のキャリア教育の充実によって、より限られた時間で指導する必要が生じたため、協同学習を取り入れることにした。まず、4人グループで話し合ってからプロットを決め、原稿は宿題として個々

に書いてくる。次の時間に各グループ1人の原稿を発表し、良い点や改善したい点を指摘し合う。

「原稿は名前を伏せて発表しているため、生徒からは活発に意見が出てきます。教師から指導されるよりも、クラスメートから評価されたり指摘を受けたりする方が効果が大きいようです。化学反応が起きたかのように、生徒は一生懸命に小論文を学ぶようになりました」（梨子田先生）

今後は他の教科にも協同学習を広げていく方針だ。

「授業を活性化し、意欲を高める上でも協同学習のメリットは大きいと考えています」（高橋先生）

### 3年間のキャリア教育で モチベーションを維持

生徒の進路意欲を高めることも学力差の拡大を防ぐ対策の1つとして、09年度にキャリア教育を刷新、3年間の活動を体系化した。

1年生では主にキャリアガイドンスを行う。社会人講師の講演会と実習をセットとし、旅行会社の講師なら講演を聴いて旅行プラン

を作成、映像制作会社の講師なら学校のCMを制作というようにし、一歩踏み込んだ職業理解を促す。

2年生は学問研究に取り組み。大学教員を招き、計12の模擬講義を開講。学部・学科選択や3年生のコース選択を考えた上で志望理由書を書かせる。2月にいったん完成させ、3年生4月以降に何度も書き直させる。

「2年生3学期に志望理由書を書いて目的意識を持たせると、3年生進級に向けて意欲を高める効果があります。志望理由書をきちんと書けるほど意思が明確になれば、苦しい時期が訪れても投げ出さずに頑張れます。生徒は卒業式後も登校し、進路が決まるまで決して諦めません。前期日程が不合格でも全力を尽くせるからこそ、後期日程で毎年20人を超す合格者が出るのです」（小田島先生）

高校で新課程が全面实施となれば、中学校で広がった学力差が更に拡大する恐れもある。同校は師弟和熟の考え方を改めて見直し、生徒一人ひとりの学習と意欲を支える指導を強めていく考えだ。

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



## 今号の視点

# 大学での学びへの意欲とスキルを 育成する初年次教育〈西日本編〉

専門教育を学ぶための基礎となる「初年次教育」を積極的に行い、学生が大学での学びに向かう意欲を高め、スキル養成や専門教育への土台づくりを行う大学について、10月号に引き続き西日本にある2校を紹介する。

教育目標である「4つの力」の  
定着を初年次に徹底

三重大  
「4つの力」スタートアップセミナー

### ◎課題意識と狙い

三重大では「4つの力」スタートアップセミナー（以下、スタートアップセミナー）が1年次の必修科目である（人文学部は選択制）。同大が教育目標として設定した「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」の4つの力を軸に、学生が主体的に学ぶための素地を身に付けることを目的と

した科目だ。

「教育目標が掛け声だけに終わらないように、学生にしっかりと浸透させるために必修科目にしました」と、授業を担当する高等教育創造開発センターの中島誠講師は説明する。以前からPBL（\*1）に力を入れていたこともあり、「1年次の早いうちに基本的な学びの姿勢を養成したい」という全学的な意向も導入の背景にある。

### ◎取り組み内容

スタートアップセミナーは、同大の共通教育（いわゆる一般教養）の核となる科目だ。全15週の

授業があり（図1）、担当は中島講師、同センターの長濱文与准教授、中山留美子講師の3人。学部所属教員のサポートもあるが、主にこの3人の教員が、30クラス（1クラスは4人×10グループ）、計約1200人の新入生のほぼ全員を指導する。

半期の授業でのグループ・プロジェクトを通して「4つの力」のスキルを学び、最終的にはグループごとに設定したテーマに取り組み、発表する。発表テーマは、「節約生活の方法」「ストレスマネジメント」「どんな医師になりたいか（医

学部）」などさまざま。発表に対して、教員や同じクラスの学生から論理の一貫性などを厳しく評価され、フィードバックを受ける。

「この学びを通して学生は、主体的に学ぶことやクリティカルシンキングなどのスキルの重要性を知り、その後の専門教育に生かすことはもちろん、社会に出ても役立つ、新入社員研修のような側面もあります」（教育学部・南学教授）スタートアップセミナーの授業は週1回行われる（2単位）。毎回の授業の前半は講義、後半はプロジェクトを進行させるためのグ

\*1 Project-based Learning の略

図1 三重大「『4つの力』スタートアップセミナー」の授業内容

回	テーマ
1	導入、大学での学び（モチベーション）
2	グループ活動の基本（社会人としての態度）
3	アイデアの発想（感性）
4	テーマの設定（課題探求力）
5	情報の種類と特徴（情報受発信力）
6	計画の立て方（問題解決力）
7	情報収集における手順とマナー（倫理観）
8	プロジェクトのピアレビュー（感性、共感）
9	情報の吟味（批判的思考力）
10	レポートの作成（論理的思考力）
11	発表の方法（情報受発信力）
12・13	プロジェクト発表と評価（統合力）
14	プロジェクトの振り返り（統合力）
15	全体の振り返り（統合力）

毎回、授業の冒頭30分で前時の振り返り、本時のテーマについての講義が30分、その後グループ討議を行う。毎回、振り返りを行いながら、グループでの議論の深まりに合わせてスキルについてレクチャーをする。  
\*大学資料を基に編集部で作成

グループディスカッションに充てられる。授業の講義やグループ活動では、スタートアップセミナー専用のテキストを使用し、テーマを深めたり、議論を活性化したりするために必要なスキルを学びつつ進められる。このテキストは、教育目標である

る4つの力の要素を全クラス同じレベルで伝えるために使用されている。テキストには次回予告や振り返りシートも用意されており、予習・復習、授業外でのグループワークなど、自主的な学習にも取り組むことが前提となっている。このように、

学生が自主的に取り組まざるを得ない仕掛けがふんだんに盛り込まれているのがスタートアップセミナーである。

三重大では他に各学部の基礎ゼミもある。スタートアップゼミも「大学として共通で養成したいもの」、基礎ゼミは「学部固有に必要なスキル養成」と、それぞれの役割を明確にしている。また、共通教育には共通ゼミナー、PBLゼミナーと呼ばれる学部横断型のゼミ形式科目（選択制）もあり、大学で学ぶ土台づくりのためのさまざまな機会が設けられている。

◎成果と課題

専門教育や他の科目担当の教員からは、「グループ学習に慣れているので、PBL型の授業をしやすくなった」「学部で一から

教えなくても共同作業が出来るようになった」と評価を得ている。生物資源学部1年の山形隼大<sup>はら</sup>さんは、グループをまとめるのは大変だったと振り返る。

「就職をどう有利にするか」をテーマに決め、昼休みや授業の空き時間などに、図書館での資料収集や、就職支援センターの職員に取材をした他、親の話を聞いたり、ネットで調べたりと、授業外学習に積極的に取り組みました。そこで得られた情報はグループで持ち寄って話し合いました。グループをまとめる

力、皆の意見を要約する力、資料の作り方や発表の仕方、社会人としてのマナーなど、いろいろな面で学ぶことが多くありました。更に、自分から動かないと相手も動かないことも身を以て知りました」  
今では学生がこの科目を「4つの力」と略して呼ぶほど学内で定着している。課題は、学部の2年次以降の教育との接続だ。学部・学科によってスタートアップゼミナーへの関与に差があるため、必ずしも全学部・学科で円滑に接続できているわけではない。また、今の形が完成型

というわけではなく、初年次教育（共通教育）のあり方自体の見直しを含め、改善を続けていくという。

少人数ゼミでスキルと共に人間関係や視野を広げる

近畿大  
基礎ゼミ・専門基礎演習

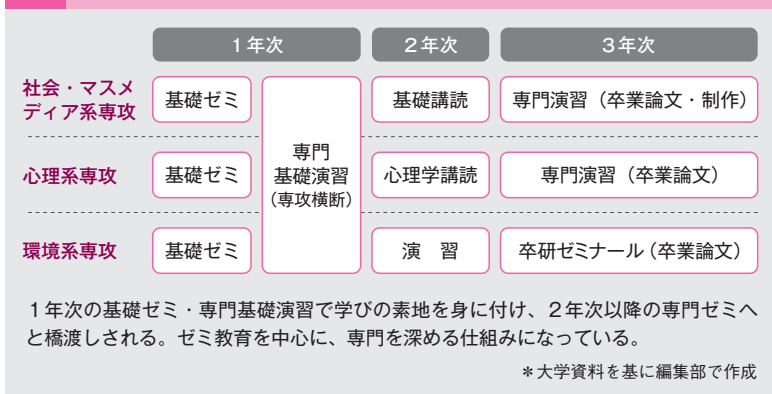
◎課題意識と狙い

近畿大では、全学部で1年次の基礎ゼミが必修であり、これに加え、「マイキャンパスプラン」という、半期ごとに面談を行いながら学生の目標・達成カルテの作成に取り組みなど、少人数教育や学生個別の対応に力を入れる。特に、2010年度新設の総合社会学部では、より「教育」に重点をおいた体制が取られた。

総合社会学科1学科（入学定員450人）に、社会・マスメディア系、心理系、環境系の3専攻を設置し、47人の専任教員で構成される同学部は、小さな総合大学ともいえる。同学部の1年次前期には所属専攻の「基礎ゼミ」があり、後期には専攻横断の「専門基礎演習」がある。通年で、ゼミが必修となるシステムだ（P.44図2）。

\*2 Teaching Assistant の略

図2 近畿大総合社会学部の4年間のゼミ教育



総合社会学部事務部の木地平浩次<sup>キヘイ</sup>事務長は、「高校と違い、大学はクラス単位で授業を受けるわけではありませぬ。学生が孤立しないよう、居場所のある学部にしたいと考えました。また、さまざまな分野の教員が集まる学部の特性を生かし、多くの教員と接点を持つことで多様な考え方があつたことが、このようなゼミ中心

のカリキュラムにした背景です」とその意図を語る。

### ◎取り組み内容

前期の基礎ゼミでは、新入生は専攻ごとに1クラス12〜15人で組まれ、学部共通のテキストを使いながら、大学での学び、レポート作成法、プレゼンテーションの方法などを学ぶ。他大学の初年次ゼミでは1人の教員が15コマを担当するものが多いが、同学部では、学生の所属専攻の3人の教員が自分の専門の話題を織り交ぜながら5コマずつ担当し、これらのスキルを指導する。

授業は教員各自の研究室で行われる。学生は複数の教員と交流し、研究室で学ぶことで、同じ専攻の教員であっても視点や考え方だけでなく、研究室の蔵書の種類まで違うことを知る。

総合社会学部環境系専攻の久隆浩<sup>ヒロタカ</sup>教授が担当する基礎ゼミの5コマの授業では、「自己紹介」「新聞の社説を読んで見出しを付ける」「プレゼンテーション」「合意形成のトレーニング」としてのディスカッションなど、密度の濃いゼミ活動を行う。特にディスカッションでは、意見の

多様さ、答えが1つではないことを強調する。

後期の専門基礎演習では、クラスの替えがあり、3つの専攻の学生混合の12〜15人1クラスの編成となる。教員も3つの専攻の教員が入れ替わり、2週ずつ計7人でそれぞれの専門分野を基にゼミを進める。

この結果、1年次を終えた時点で、学生は10人の教員と接点を持つだけでなく、専攻を超えた学内の学びの友人を多数得られる。

「この仕組みは学生に好評です。多くの先生に出会える、さまざまな考え方が分かる、他専攻に仲間が出来ること、その理由です。この仕組みは『先生と仲良くならうよ!』が最大の目的です。大学を好きになる、先生を好きになることが学習の動機付けにつながり、自分の専門や将来のキャリアを考えるきっかけとなるのです。教員も1年間で120人の学生と接する中で、顔と名前が一致する学生が増え、個別対応が可能になるのです」(久教授)

### ◎成果と課題

学生は教員と交流を深めることで教員の専門分野や授業に興味を湧く

という好循環も見られ、その結果、2年次以降の科目選択もスムーズに出来ているようだ。大学が行う学生意識調査では、1年次での体験が、2年次以降の学びへの期待につながっているという結果も出た。

社会・マスメディア系専攻3年生の山本雪乃<sup>ユキノ</sup>さんは、「議論や自分の意見の発表などを通して、自分で学びかけがつかめた」と振り返る。

「後期は先生が2週で交代するので、7人の先生の専門分野に触れ、2年次以降のゼミを選ぶきっかけをつかめました。先生と研究室でお昼を食べることもありますし、1年次のゼミで知り合った学生とは今も仲良しと、交友関係も広がりました」久教授は、今後の課題として学生の二極化を挙げる。

「我々の狙い通りの力を発揮できている学生と、なんとなく学生生活を送ってしまう学生がいます」

課題に熱心に取り組んでいる学生ほど厳しさを感じているが、そうでない学生は楽だと感じているという。そうした学生には、評価方法の改善や「マイキャンパスプラン」の面談を利用した個別フィードバック

意見の言い方や  
話を聴く姿勢が変わった



三重大教育学部  
家政科教育コース1年  
田中 里菜  
(私立鈴鹿中学校・高校卒業)

「4つの力」スタートアップセミナー」はグループ活動中心の授業で、グループ内の役割分担や互いの進行状況を把握するのが大変でした。私は中学・高校時代は何でも自分1人で突っ走ってしまうタイプで、グループ活動には前向きではありませんでした。しかし、授業を通して、自分の役割を果たすことや責任感を持つことの大切さ、成果を出す難しさを痛感できました。

また、主観と客観の両方の視点を持つように先生からよく指摘され、他人に対しての自分の意見の言い方も学びました。毎回、授業後に「振り返りシート」で反省したことで、意識できたのだと思います。最後のプレゼンテーションでも言いいたことが伝わらず反省ばかりでしたが、発表の構成自体は評価されたのはうれしかったです。

授業を聴く姿勢も変わりました。初めは興味が持てなかった授業も、板書を単に写すのではなく、「先生の伝えたいことは何だろう」と意識して聴くとだんだん興味が持てるようになり、知らないことは調べるようになりました。

初対面の人とも話し  
発表も苦にならなくなった



近畿大総合社会学部  
環境系専攻3年  
野間 彩希  
(大阪市立東高校卒業)

前期の基礎ゼミでは、先生や他の学生と、「意見を言う↓グループで調べて発表する↓議論する」を何度も繰り返しました。学生同士はもちろん、先生とも「距離が近い」と感じるが多かったです。後期のゼミで、他の専攻の先生や学生との関係もうまくつくれるようになっていました。

どの先生の授業でも発表の機会が多く、資料作成や発表にも慣れました。3年生になった今は久先生のゼミで、地域の小学校や地元イベントの企画、広島県三次市の限界集落の調査などに携わっています。ここでも1年次のゼミでの経験が生きていると思います。特に、知らない人へのインタビューや、人前での発表が苦にならなくなっています。

また、聴いた話をその場で自分なりにまとめ、更に深い質問をするというようなことも出来るようになりました。大学入学前までは、知らない人や大人与話することが苦手で、授業でも当たるのが嫌だったのですが、今は抵抗ありません。

などの対応を検討しているという。また、10年度に入学した1期生が卒業する時点でチェックを行い、改善点を見つけていく予定だ。

進路指導に生かす

教育内容にプラスして  
運営体制にも注目

三重大では「4つの力」という大学の教育目標に準じたスキルを養成し、近畿大総合社会学部ではスキル養成と共に学生の意欲向上や視野の拡大を狙いとしていた。いずれも、初年次に大学で学ぶためのレディネスをしっかりとつくる好例と言える。

また、三重大では3人の教員がテキスト制作も含め、運営・改善をチームで行い、近畿大総合社会学部では複数の教員が1つのクラスを担当するため、情報交換を密に行っていた。こうした組織的な取り組みは、授業内容の水準を維持・改善していくための1つの解といえる。

学びの内容だけでなく、取り組みの運営が組織的、安定的になされているかどうか注目することも、大学選びの1つの指標となるだろう。

取材・編集協力：山内太地

初年次教育に少人数のゼミ形式を取り入れる大学・学部を紹介

特徴的な初年次教育実施大学 西日本編

京都大  
ポケット・ゼミ

1年次対象に開講するゼミ形式の科目。歴史・地理・古典の講読や、環境・資源・宇宙、医学等の最先端の学問、野外実習など、総合大ならではの豊富な内容だ。ただし、新入生の6割ほどしか受講できない。

大阪市立大経済学部  
基礎演習など

1年次前期の「基礎演習」で、文献講読や少人数での討論、プレゼンテーションなどを学び、その後、「イノベティブ・ワークショップ(課題探求演習)」で課題解決法を学ぶ。2年次後期の「論文演習」では、修了論文を執筆する。

同志社大商学部  
入学前教育と導入教育科目

入学予定者を対象に入学前教育を実施。入学後の導入教育科目「アカデミック・リテラシー」につなげ、経済活動の現場で社会体験をする科目「ビジネス・トピックス」も用意する。いずれも選択科目。

武庫川女子大  
担任制

開学時から担任制を導入。担任は1年生のゼミ「初期演習」も担当する。5月の体育祭は全員参加。学科単位で競う応援合戦は上級生が指導する。2泊3日の宿泊研修も全員参加。

### デジタル化はアナログの利点を生かす手段

10月号の特集では、デジタル化の現状と指導に取り入れる具体例がよく分かり、参考になった。板書に意味がある場合と無駄になる場合があり、後者はデジタル機器による効率化が有効になる。ただし、デジタル化はあくまでもアナログの利点を生かす手段であることを忘れてはならないと思う。

〔愛知県・匿名希望〕

### 生徒が学びに向かう可能性につなげたい

今、指示待ちの生徒が多く、言われたことは出来るが自分から何かを出来る生徒は少ないと感じる。10月号の特集を読み、生徒が自ら学びに向かうための1つの可能性として、デジタル機器の活用は欠かせないものだと思う。〔静岡県・沼津市立沼津高校・谷野公彦〕

### デジタル機器の活用が進む環境整備を望む

10月号の特集にあった、「デジタル化による効率化、分かる授業をより良い環境で」という話はとてもよく分かる。しかし、重要なのはそれらの環境だ。デジタル機器はそろっているが、利用環境が整備されているとは言えない。プロジェクトを教室へ運び、セッティングすることを毎時間できるのか。もっと使い勝手の良い環境の必要性を強く感じる。同時に、協同学習などの言語活動や表現活動の充実、学習の基盤をなすものとして、これから特に重要になるだろう。学力を伸ばすためには、言葉は不可欠だからである。

〔愛知県立熱田高校・辻村博〕

## VIEW'S SQUARE

Volume 5

読者のページ

教育最前線からのホットな話題を紹介します

### 生徒が自ら学ぶ姿勢を育てているかを見直したい

10月号「指導変革の軌跡」の岩手県立盛岡第三高校の記事を読み、「授業そのもので学力を付けていくという本来の姿に立ち返るべき」という指摘に共感した。生徒が自ら学ぶ姿勢を身に付けることは、大学進学後のためにも重要である。しかし今は、多くの学校で補習授業が恒常化しており、何事にも受け身の姿勢を教師が付けさせてしまっているように感じる。

〔長野県・匿名希望〕

### 生徒に真正面から向き合う教師の姿が印象的

10月号「VIEW'S REPORT」の鳥取県立倉吉総合産業高校の記事を読み、誌面での報告以上にさまざまな困難や問題を解決・克服し、今後も更に続けていかなければならないのだろうと直感した。ここまで真正面から生徒に向き合う教師集団の存在自体がまれだと思う。方法には賛否両論あるだろうが、問題解決のためには、当初はかなりの無理を皆で担わなければならないのも厳然たる事実だろう。それにしても、20年余りで生徒数は約230万人減、高校は約490校減という、学校再編を促す現実の数字もすごいと感じた。

〔奈良県・私立奈良育英中学高校・久保貴若〕

教師川柳

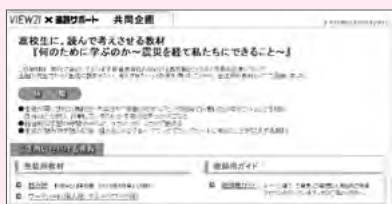
年越しに 必勝誓う 受験生

兵庫県・とんちんかん

### 高校生に読んで考えさせる教材（無料）

## 「何のために学ぶのか～震災を経て私たちにできること～」 をご用意いたしました

「VIEW21」高校版2012年6月号の特集「他者のために学ぶ」をお読みいただいた先生方から「授業で生徒に読ませ、考えさせたい」との声を多くいただきました。そこで、記事にワークシートなどを加えた、生徒用教材をご用意しました。ぜひ、「総合的な学習の時間」やLHRなどで活用ください。右記ウェブサイト「ベネッセハイスクールオンライン」から無料でダウンロードしていただけます。



\*内容や画面デザインは変更になる場合があります  
<http://bhsso.benesse.ne.jp>  
\*Benesse High School Onlineは高校の先生専用の情報サイトです。ご利用には学校別のID・ログインコードが必要です

### 編集後記

◎グローバル化社会においても、広い世界に出ていくのと同様に、地元・地域に根付いた生き方も価値ある選択肢であり続けるはず。現実的な地域の課題もある中で、高校生が主体的に「地域に生きる」ことを選ぶためには、どのような力が必要なのだろうか……このような課題意識から今回の特集を組みました。先生方や取材をさせていただいた方のお話を聞き、編集部で議論をする中で、最初は見えなかったものがだんだん形づくられていく過程は、決して「楽」ではないけれど、「楽しい」ことでした。対話することの面白さを、少し感じられた気がします。（青木）

### ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所 ホームページ開設のお知らせ

ベネッセ教育研究開発センター高等教育研究所のホームページを開設しました。高等教育に関連した独自の調査データなどを公開しながら、これからの社会で活躍できる人材を育成するための大学教育改革を支援します。  
<http://benesse.jp/berd/koutou/index.html>

# VIEW21

2013  
February  
2月  
Volume 6

次号は  
2月14日発行(予定)  
「VIEW21」高校版は  
年6回の発行です

VIEW21 12月号 Vol.5

2012年12月6日発行

発行人 新井健一  
編集人 原 茂  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター  
印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 中丸満、二宮良太  
撮影協力 荒川 潤、川上一生、南弘幸、ヤマグチイッキ  
イラスト協力 山本重也  
VIEW21編集部  
〒206-8686 東京都多摩市落合1-34  
電話 042-311-3391

©Benesse Corporation 2012